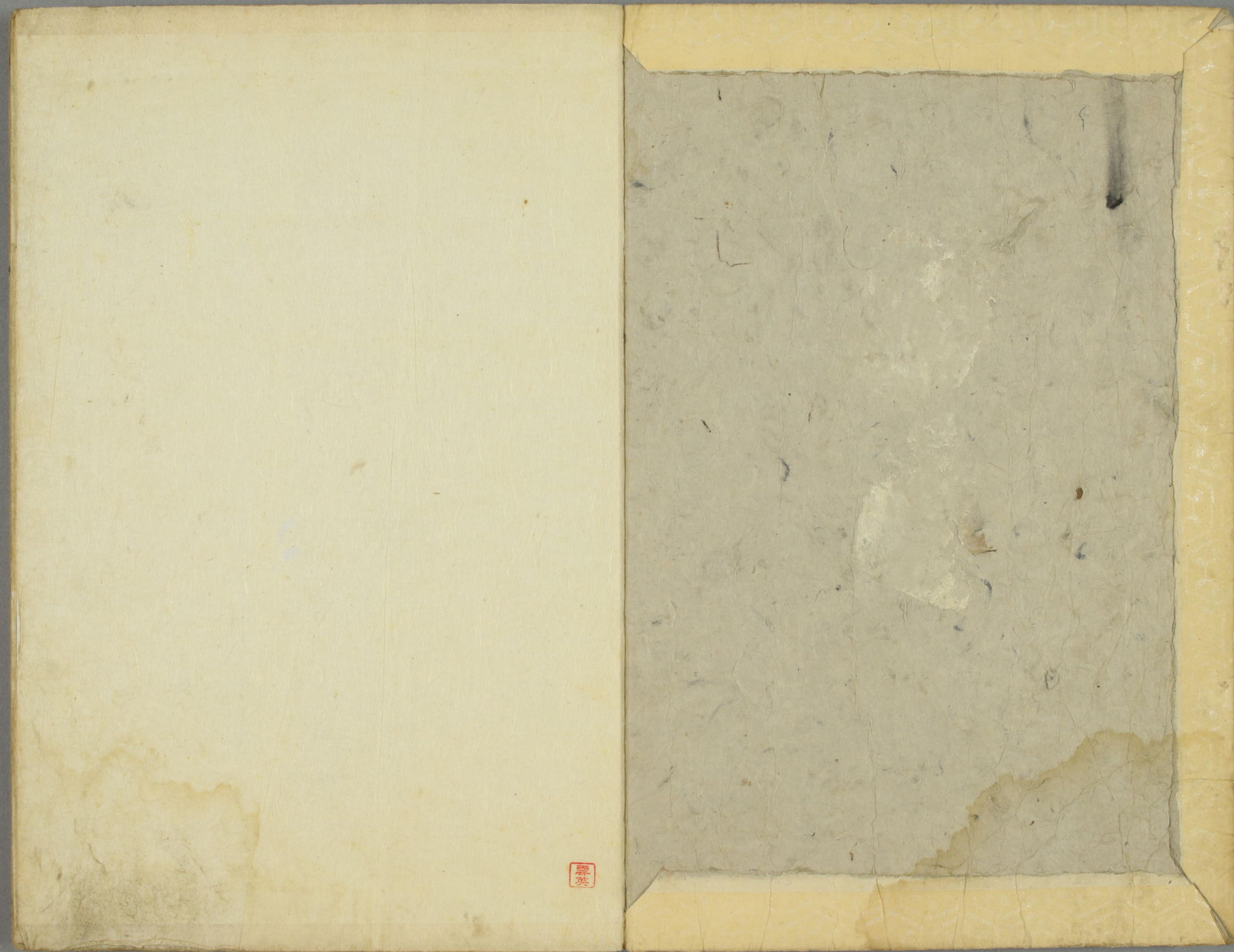


卷之二

七



7 8 9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7



小汀氏藏書

一夕あわたり城病乍れすよあを
而て即泊する事半が付大よ笑て
ク孔參參の筆へ耳よりはよ
きをやく 終參參と取
持ふと改して御つとハ接
れ結成の事はよも用ふとす

遷魏紙首之一

弦無孔比琴 予よおがり破窓を
補ふよ勝 予技次已答ひ
さゆふと總紙料 と物んじあ
せぬと云放ノ名とモ

足薪翁

還魂紙料目録

上之卷

- 一 千年飴
二 鹽屋長次郎
三 安阿彌の作
四 若衆人偶
五 淨土雙六附道中雙六
六 懸鬚
七 キリコ燈籠
八 淨瑠璃節の起原
九 夷屋吉郎兵衛
十 喉が渴とり謡
十一 秋色櫻
十二 雛の蛤貝
十三 いとこ賀附須彌山
十四 來迎賣
十五 八百屋阿七のかぶき
十六 浅草祭の番附

還魂紙首之二

- 十七 梵天國附六段目

下之卷

- 一 七夕踊小町踊
二 醋の肴板三種
三 稲垣節
四 柴垣節
五 懇食
六 玉川千之蒸
七 江戸酸漿
八 浅草祭の番附
九 稲荷岡附小砂石
十 煙草の一服一錢
十一 煙草の一服一錢

目錄終

還魂紙料上之卷

江戸 柳亭種彦編

還魂紙首文三

一

千年餡

元禄寶永の江戸淺草にて兵衛との餡を賣りその餡の名を千年餡又哥命糖ともいふ今後此長久なるの餡ふ千年餡と書きて被士ある處に起きて生販酒を以て世間のからざるの一奇人あり今様北四孝印本宝永六年二の卷廿八年の七兵衛との餡を賣り樂に養字のわふりをまかれて中を宣をえり童ふ孫がし價のを残せどぐくぬみて酒あり春秋の榮枯と息息あり一巻の一盆ふらちをあけてまのとね飯をむすべ月と類聲とをもひの博町のさう野良のわうへとまうてまくねえ寶永六年小刀く聲をうるとのまへ貞享或も元禄の初うそと名を人不知きつゝのたゞ世間用心記刺掉の参考一の卷廿八年の千年餡はおもぢ天竺にて釋迦とより其傍壁等のつ童ふ孙がぬわくけ壽命糖を称すうて大さうありうち大道の肩をぬぎて天あ捨げし廣の

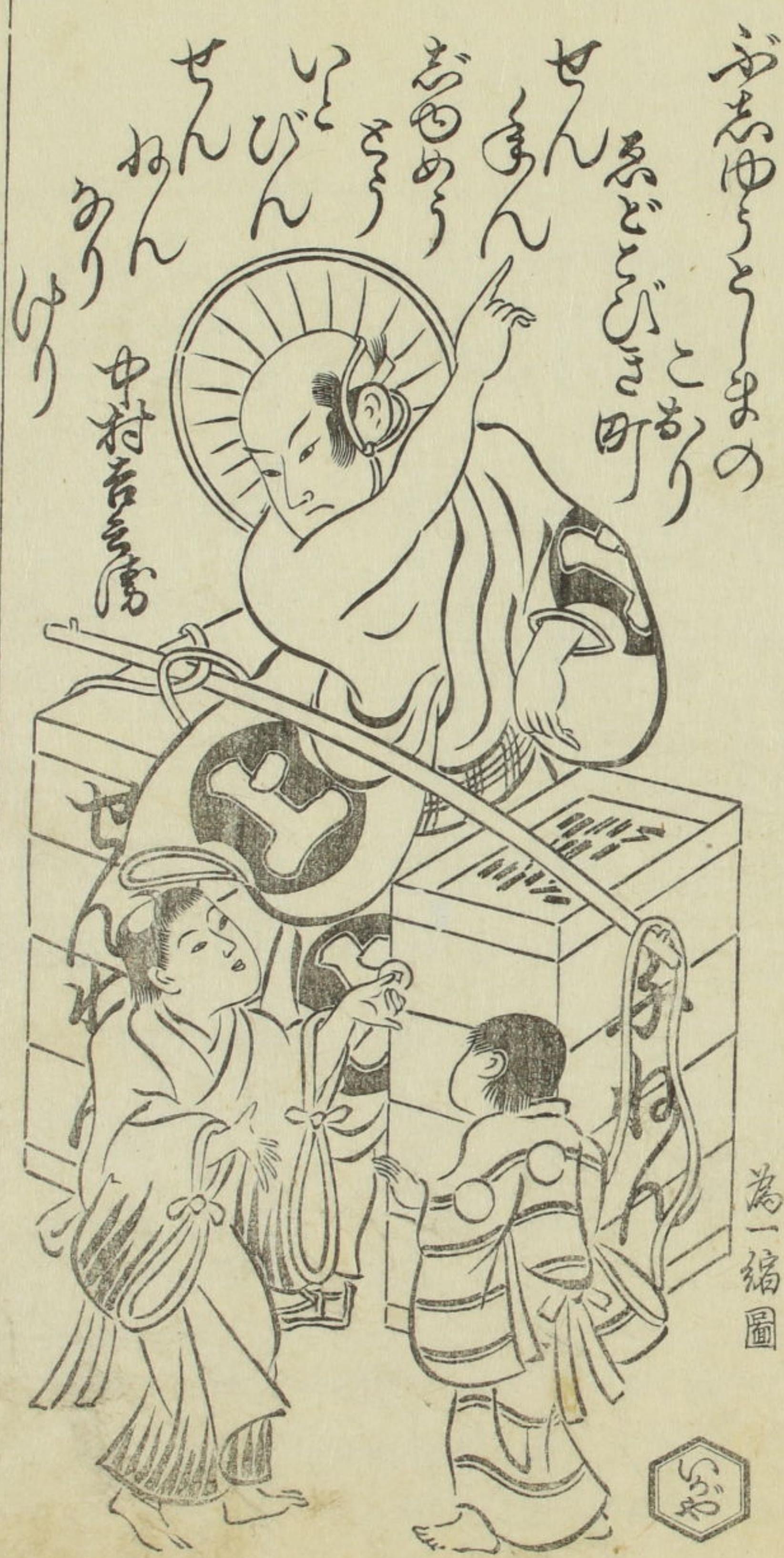
トコトコトコトコトコト

一

かねてかくをあへてもひのう者まひねと頃そまへがてと大般の生まひや
ちのとあそとあそてあふやまふらまへことれきのとてはみふらやられて云
かわまがちうへゆて流行へ土平ひとま飯等が真鼻祖ともりべー其角文集

類撰子

前夕 狩取へあぐら 路人 お仕 蓬之 宮其角十三面忌追善
附 附 ねまび見 細る 澄千弟 千金 只尺 享保四年の令
淺草をと常て徘徊するより豹形とりふくふ附異事ある笠をかざすとゆゑ
笠で見知るとりひへあべ。清十郎へ阿夏とまわすと播州娘頭の女あててまく
知る。向う通う清十郎がやあんた笠がとうにせ宮仕立がとひく小僧をとろあすと
吟あり。又俳諧文匣印本
笠をひだれし公羽の玉へ捺ますとまろと書き「初春の朝を晴れ竹巴
との画題の斐翁匂わり天ふ捺さへて小唄をうみゆゑに釋迦乃よむる傍聳葉と
用心記 小敷まつひよし絵文匣あくまく仕合の馬口に上へて吉きよめが像小僧あべ



○中村吉兵衛千手年輪七兵衛小打粉肖像
丹黄多の意にて色ども

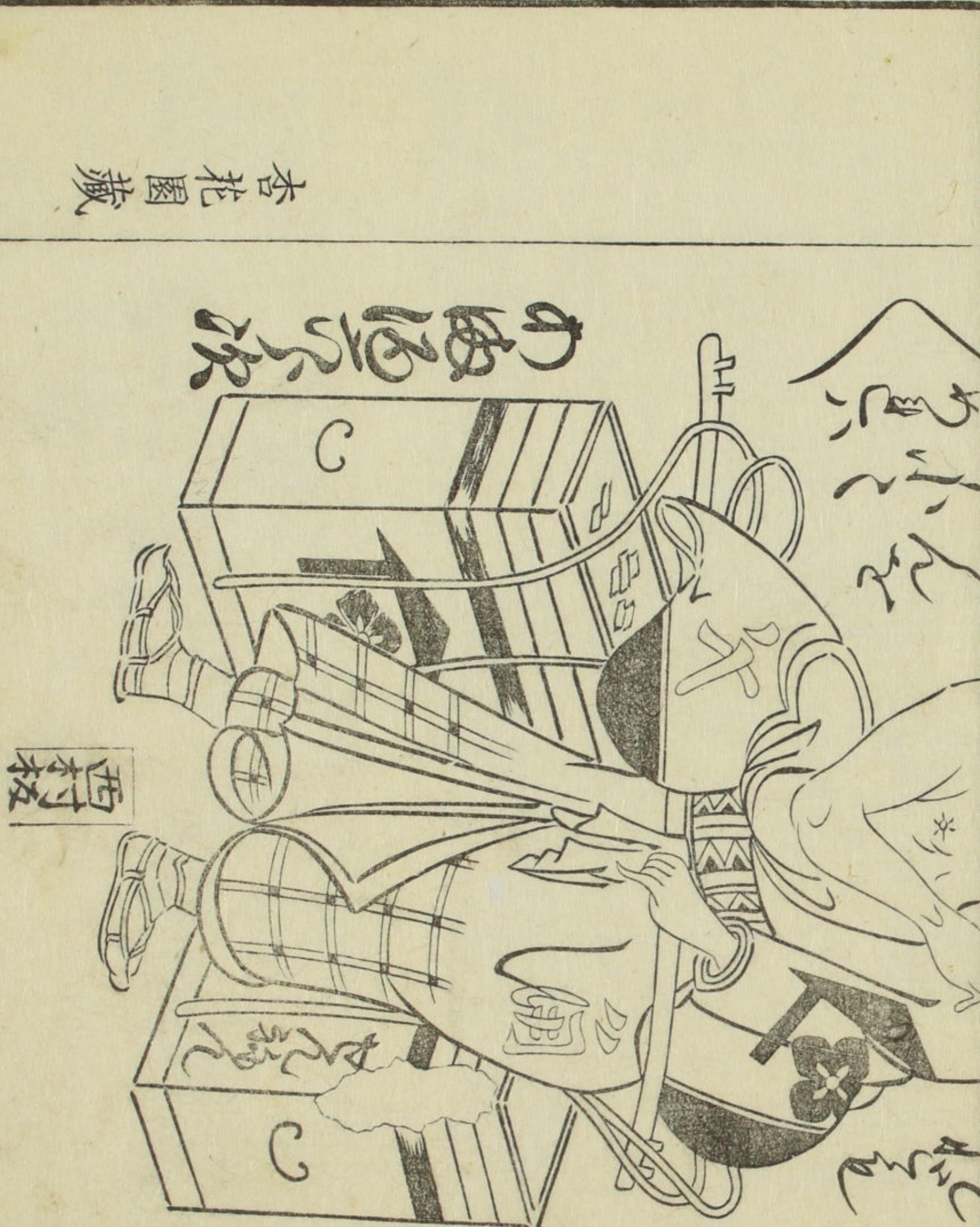
中村吉兵衛の異名と二朱判吉兵衛とて安ふあまてかづきの道外方あり
本郷町とあまとが森田屋あべくまで何とりひ 狂言う未考

毛氏本草一上卷

一一

間の仕事

○庵より木戸の絵と附るる畠を我がかき小彼名
中止居す所取といふ者の傳承系を知り、云々



見能船とアラカネの狂言の一枚絵を、久松と
白細の考収(くしゆう)に画風とゆゑを安市(やすいち)小寶(こほう)水年

杏花園藏

土佐節の淨瑠璃本

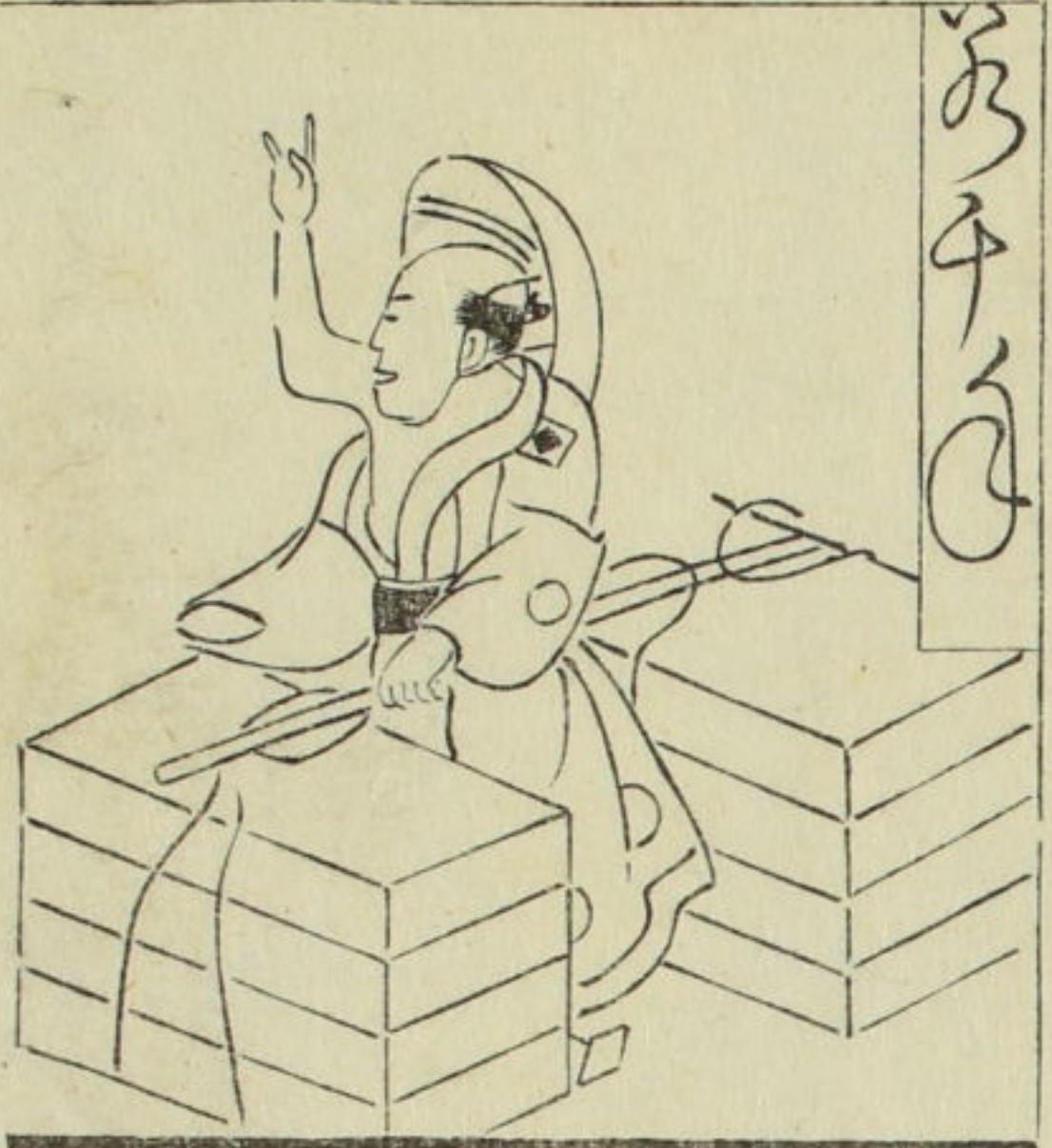
千歳飴



正徳 按
年間の表紙
印木あり
校元と下
基舊の名
又一本
板元
サ芝神明
横町
えよと
きよも
ハルギ
千歳飴うり
上方フシ
まゆんくニシテ年老ひめでよしに志の
みゆうとさうねよ花くらべりづくらる
すりぞとせうすぢ黒れあくまであがく
ざくヌ浦志須くらべくらわらわらわら
酒とりやひざやめせくあるあうとう

土佐節梅櫻山務重傳をも稿内西源太夫

とさのをうきりあうさつま
土佐掾ハ堺町薩摩三郎兵衛座の淨瑠璃左まあくは子年賣も彼をまの曲節
ゆて今抜本とひきり類あり津彌彌み縁ノがき狂言小次とうほくとめりく
千歳飴の當時学ふかどあまめへをらべーそとも百條年むくとあくて
七歳飴がまと知る者もくあく唯千歳飴の名のみ猶なり



あ千歳

正徳享保のまろト木せう繪雙六ふ此圖あり後年ふ
あまのと上りとを形めくめておぐの双六と名けり
とく今ほくもうて原板とよびまと何とひく双六
原の名をもうす
若年もとの前の七兵衛没してのち飴が名とほせ
ぬのあくべ
總く此雙六を當時流行りかき若高人の類と集
あ半來迎賣の圖もやりをも此卷の末て見そり

寛文の頃因幡とより

二 因幡の淨瑠璃附近江節

吉原の花女とく津彌彌をかう星女の津彌彌をかうる

も後か下上巻
享保十八年
新見老人記 み曰 背^{せき}の客を僕^{ぼく}に招請の馳走小屋大鼓澤濱宿
之縁もその宿者^{すくしや}と度^すあどふやはけ尾とゆことをものとて自分とくそんの轍^わ
もととく縁あり殊^{こと}に女中も絶^{ぜつ}りゆくゆきまのまふして自分がみ滌^{しつ}獨^{どく}鷹^{たか}、之縁もあらむ
吉原に因^{いん}腰^{こし}とりを女何^{どう}ておもがえええ頼^{らい}光^{こう}山入一段^{さん}萬^{まん}人^{じん}持^{もつ}の乃^の一^い段^{だん}地^じ義^より一^い段^{だん}地^じ義^よ
乃^の一^い段^{だん}大塔^{だいとう}宮の乃^の一^い段^{だん}教^{きょう}令^{れい}淨^{じょう}瑠^る璃^り四段^{よん}もがええてかうを女めにて名譽^{めいよ}を
ととて、江戸中^{ちゆう}に波^{なみ}流^{せり}云^い撮^{さく}以上^{じょう}數^{すう}を 又^{また}西鶴^{にしかく}二代^{にだい}男^{のう}印^{いん}本^{ほん}
條^{じょう}に江戸町助左衛門^{すけざゑもん}拘^{くわ}の太^お和泉^{わせん}ひきく勞^らへじ度^どよりうとび直^{なお}とく中畠^{なかはた}五日^ご續^{づき}
ての太^お家^{いえ}の上^う廻^{まわ}の義^よをもたらすとて仰^{あお}ぎ居^ゐ屋内^{うちない}臣^おが俄^か小^こ笑^{わら}して揚^あ度^どの意^い不^ふ可^可で
風^{かぜ}もいとくぬを正^{ただ}相^あひのうとお^おてかざ^{かざ}て^てタ^たの^のた^たか^かと^とい^いま^まく^くをやきく^く
夷^{えい}の^の事^{こと}の名^な物^{もの}を^を考^かえ^えぎ^ぎり^りと^と下^さふ^ふ批^ひ出^{しゆつ}す
讀嘲記^をとくく寛文中^{あく}と^とを知^しれり

吉原謳嘲記

又刺梓の年号ありとひととも寛文七年

山口 あらわし
あらわしはほくかくらのみよりもあ
くみゆよたよくびやくびやく
のをとよあねどもみめすぐくらがま
く、人の毛れをひきよとヨガ同きうよさざめ
しきるよよりひいふどといわ
あくがりのよめりよのんねよとせよあく
のかりぬまとつもじいあぼよ
ゆきもあひるよくらはよひいあそぶ
あくとつあけきがらくまくのれ人のゆくよ
まくあざきありよつてナ人のゆくとくびてくじの
十もつとやもんざる
くらざれつゆごのふのまちかと

○立正のまゝある
のふのまゝある
ようそと
ひの字を終る
ものあり

天枕とひの冊子を引て「きみたれや。きやうのうそりが。かくもおろづかほとが
せん。いあをがおをうそり」とあくびをすりあひふとこうとえまく容貌の傍れ

花洛六百勺延宝八年印本

前勺
弘徽
敵
菴

えんべゑ　あ
そのころをやり　えんご　おもつろり　きまう
勘ち未とひの若わづてを法時差　丹波が津福禰を伏えてかましが甚とせが
言

もあて云やう
あらぬの原図をう おもつたり きよみ
の上ふゆあり 其方が津留萬用あれが丹後がちよまひせんも口惜
もを

わきせりうちやう
のち やよみこひふ じさい
えご

せきよ あ
ひうち
まきうり
とうふどう もとわん
さとうまきうちがくわん
みやう
三
岡鴻吉
町の宿
も

志摩子元
むすめうらりいちまく
之の御子を師として淨瑠璃一派を語りひび
明暦中に受領して近の大掾と
もやまと
あみ
じんまき

卷之三

卷之三

のちてへも
ひ渡利整^のして語舟^ことひとゆり語舟^こが俗稱勘兵衛^{きもんかわいえん}が見之あらむ吉左衛門^{よしざゑもん}が見之あらむ

江戸總鹿子板貞享四年近江守田近江守按るみ近江守の

かどるまれ
流行へ方治實文中より起て元禄の初年より廢され其後の冊子ゆふと見えず

水元
元禄十一年印本

乙
鹽屋長次郎

あらそ
雄波少て大ふ流行き元禄の法に戸ふやき
原種を九郎が爲すのがき器
とも又をわきめい器ともう
西鶴置土産
元禄六年

印
本
ふ
少
年
の
事
と
の
條
小
松
風
琴
の
四
年
十
七
影
人
死
て
は
ひ
や
い
は
り
口
う
も
死

久
り
て
駕
か
れ
ま
を
写
し
や
ひ
品
玉
壇
の
長
沙
昂
ま
さ
り
み
ひ
又
餘
情
男
元
禄
十五
年
印
本
ふ
酒
の
呑

まちうきど
口かと牛猪ウシかても飲ヒクべとからすも極カタマリ度カタマリ長次郎ナガシロが本戸十二丈キシメイの口カミふ相應シヨウヨウやなぐり

さて不^{まづ}益^きと持^も云^く 亂^{れん}は上^{じやう}戸^どを長^{なが}近^{ちか}郎^{ろう}ふ
比^ひて胡^ごの文^{ふみ}あ 怪談^{きだん}諸國^{しょくこく}物語^{ものがたり} 正德^{セイドク}二年^ニ 松田^{まつだ}がからず 橋^は廻^{まわ}ひづま

怪談諸國物語

前勺
水經
麺汁啜てうるる室久方
長雅
が節のあやれ道奥
艶士

夷客傳

本居宣長著
日本書紀傳

云々 松田がかうテのと予う苏モ。又 軽口のよ後五の巻ふ
累町にて今より房より其

能詭古道異

下りますと、横賣人長次郎根本へ是ぢやわづらるを肴ます牛をのますと、あ戸
きちよだく　まゐる一びえり
緊ふ呼れど極悪も良知とありせし居四五軒もあまびいばくう正真あくえとをひづるて
きどぐち　あ戸口より覗くその中に子ども五四人立あまびて覗きゆくれば、あ戸番腹をきくうちあ
こあゑわ　まふ
子どもへば、ま戸み何がかもあらんと云うて叱つて、とひくあしの話を載されば
あ　のせ
當時も元氣　をうまれ　ゆき
都入平とある者の作にて、刻梓の年号を

關とくとも卷中

前々曲でうるさいことをひでこそあれ
附々氣乞のむと吾不動様の長持

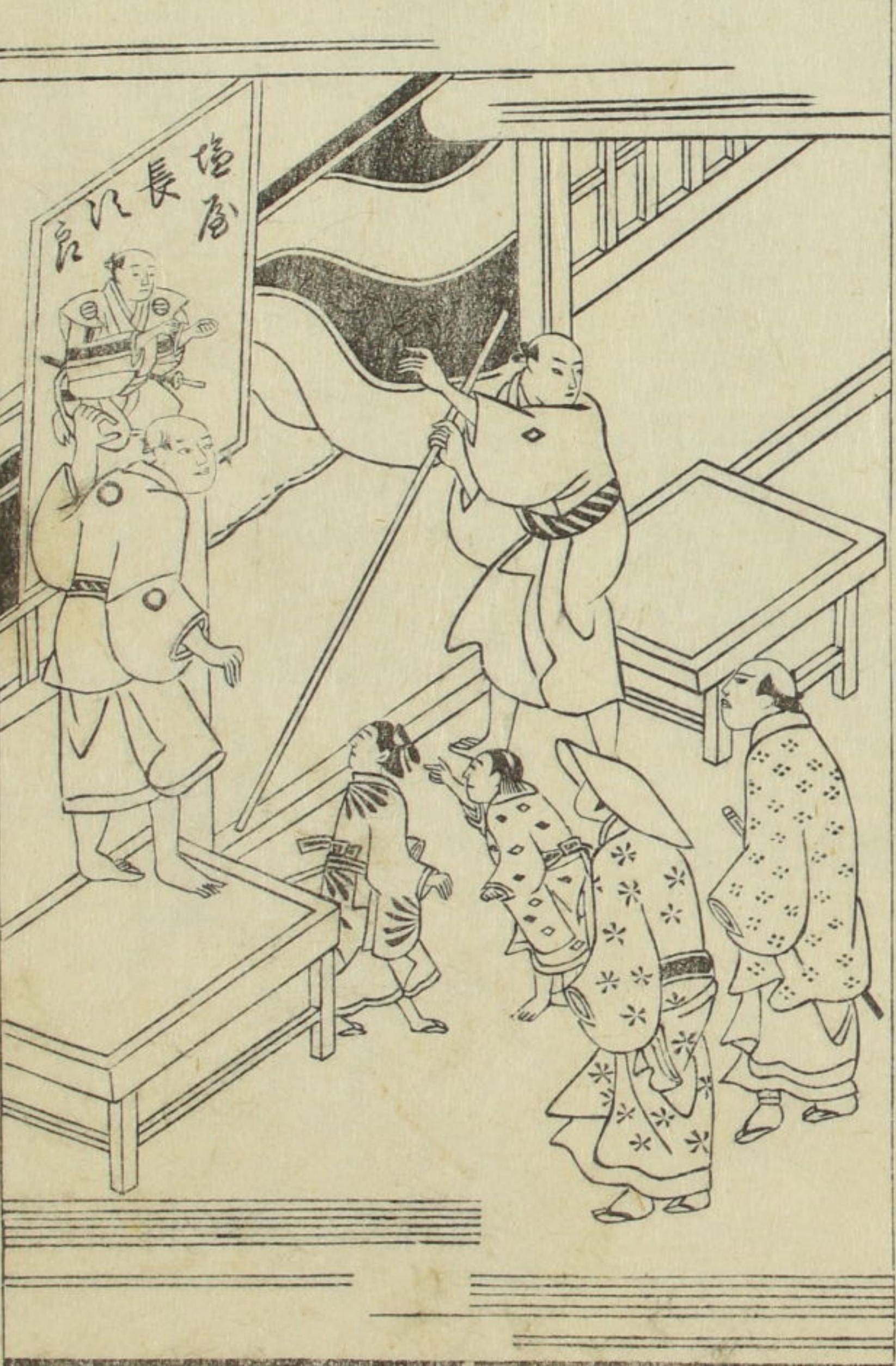
言水勺集 毛登柏
は書る享保二年の印本あれどあくまでもとじてある
おとくと集め一あとは勺元禄年間の今あくまでも

胡勢やさてと富士天台長印郎 言水

湖旁やさすを富士天台

あわや長老即^{タマ}とりを出で放下^{ハラフ}も目^{ムカシ}
うえまくふえ
ふ

強度今の大勢は眼上の不二ひとの毛様の長波麻に御うれば、まことにその通りの



縁とゆてあり予はるぬもさよまかぐら雜言の一つ是慰みふもと

○あらわのとものうひよ廢の活小合り言水の重頼門人ゆて延寶の江戸

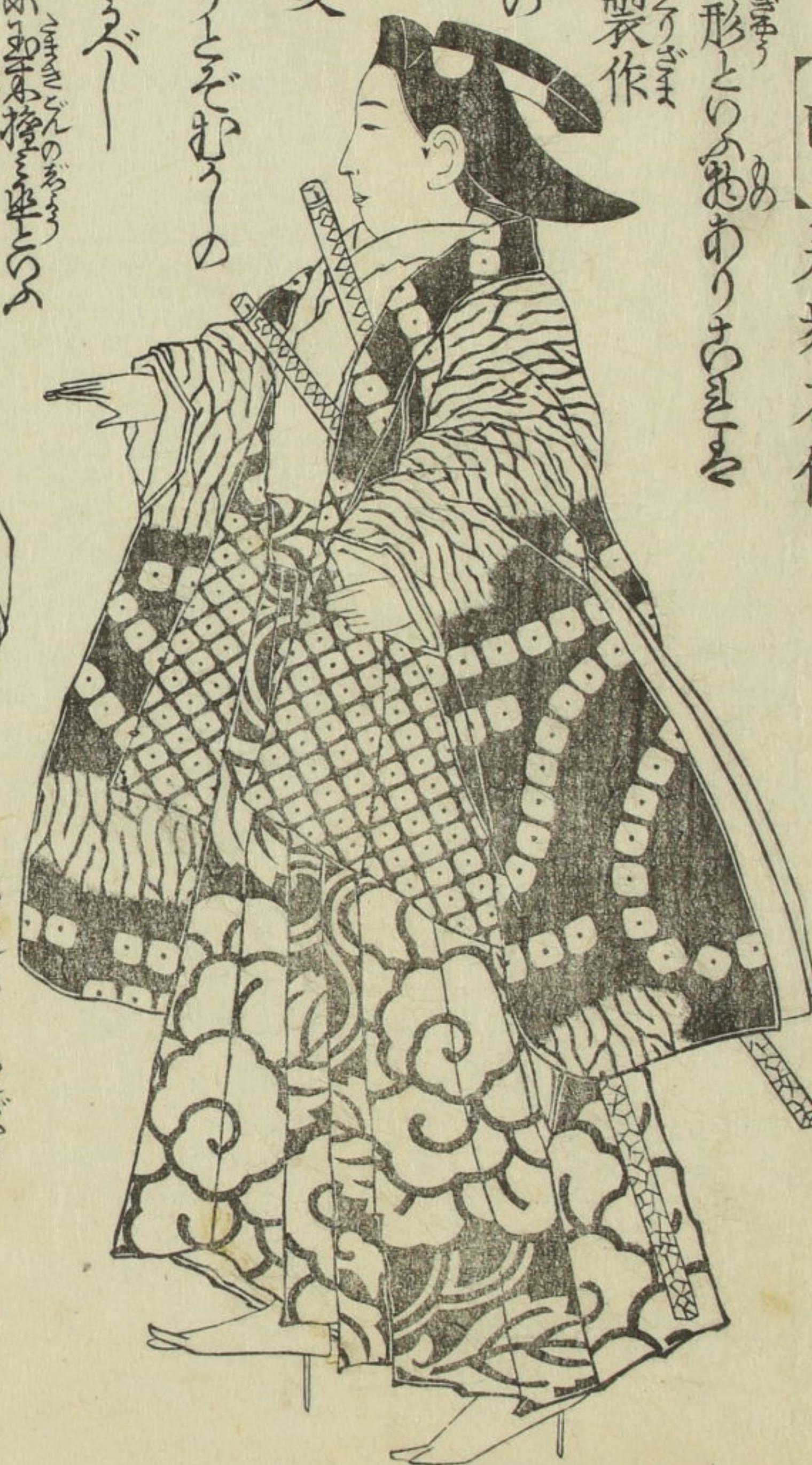
紫苑堂太平記享保四年も長慶院より果より御海のものをいたして本格の言水と稱せらる波が夕集小長次郎がその刀をさうめ最もいほじ又元禄十四年の印本梅園堂太平記
寶永中印本移盆等も小長次郎が名刀えり

○生之弓用せ輕口
りよ、弓の矢を引くに使ふる。口は弓の張る所である。

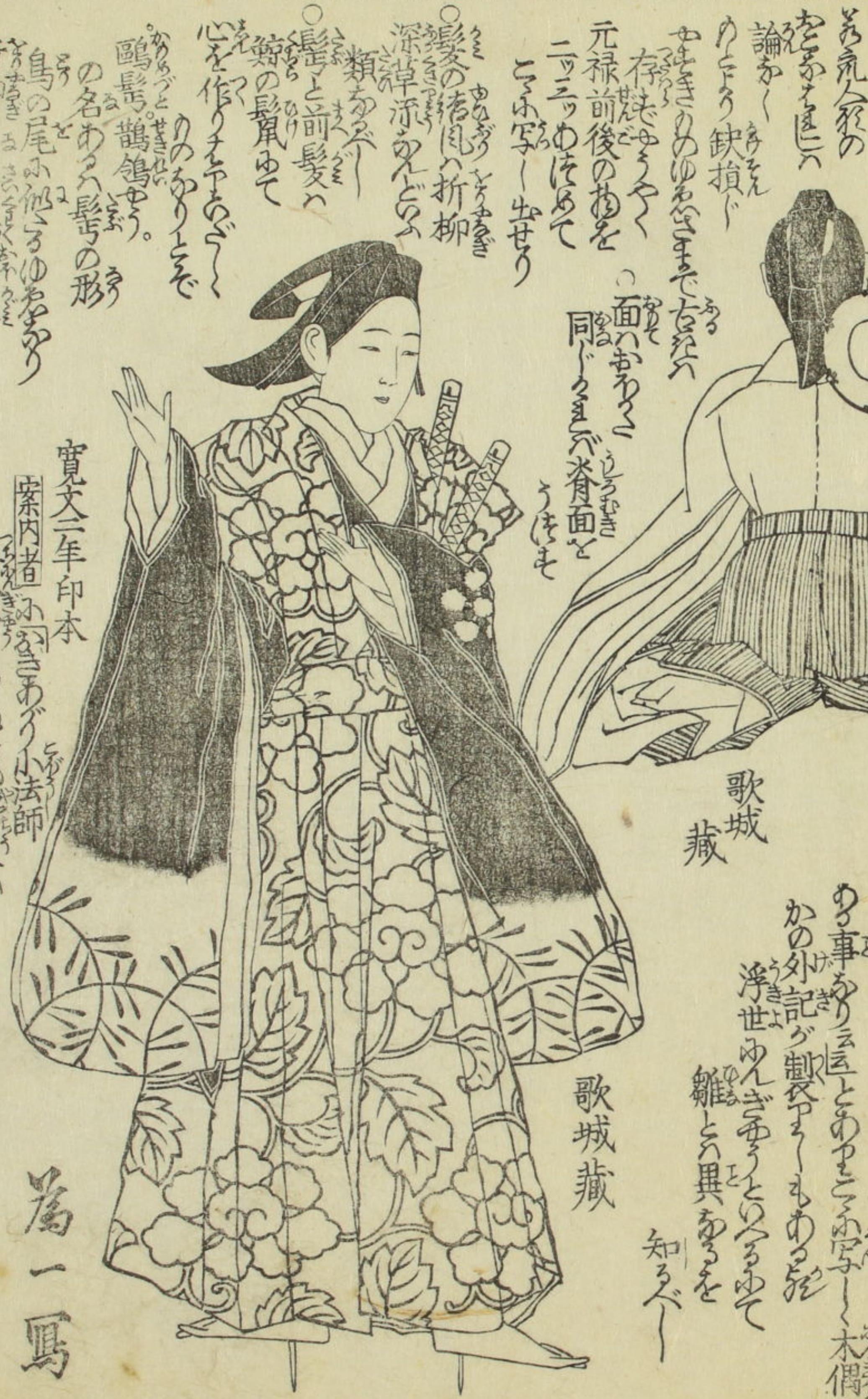
入寶永七年の写本
寄木との小唄み
あらゆ中止をきの音と
まことに人情をようのむ
根の三指のまかさざひ
のめじりがれどそれ
とゆき生るをのむ旅家
主上戸をみてゆれ
よとつてゆき寄木と
当耐人ゆきとを
うわづやうゆきの名
あまく同年の印本

四若衆木偶

A black and white woodblock print illustration of a woman in traditional courtly attire, holding a fan and a sword hilt. She has a large, dark, pointed headdress. The background features vertical Japanese text columns.



ゆき事あり云々とあやこふ家へ木偶小
かの外記がきグ製つくりヤマもゆるを
浮世うきよゆんぎあうとりうを
離ひまとえ異ことあを
知しぐ



毛氏
卷之三

五 安可爾の作

今ひどき見るる如きの鄙俗女の姿ト見しを離師の名ふ准へて讚る事あらず古今の人情へかゞくぞうのゆそむうかゞきの少年と安阿彌の作とのに更あり安阿彌ハ運慶のすすみて建仁元久の頃の佛師あり焉良縹倉及信園ふ安阿彌が作とりて佛あまくわり端正美妙あるが故也佛面をうてかゞき治郎の艶あふ譬言より浮藏主のひ生く諺あひビ野良虫明暦年間印本 加川右近といふかゞき野良を評する句より少年底どがあやしのよしわざとぞらんもおとあげあつておまかづうまほほ面躰へりつまほあんあいの拂作おてもあらべきうかをておむくゆて鴨とぞらぬのと安阿彌ハ初名扶慶とぞれ運慶の子早慶のおとまきのほか安子ありと人倫訓蒙圖彙みことえり

原素百部
宗因独吟

崇因独吟

- 3 -

二二

卷之三

前
附
書
物
の
作
ぢ
や
某
部
ち
や
を
の
月

ねずみど

ひせうねんちや
の第少年轻がまゆ御り出のを又もの人々と耳のこゑまでわざて涎を流り附りあひまう
こゑ
ひれあく
さか夷をあびて我死なをきよ堪ざるとよもあり又さうけのまのあみの御作をぢやう
くあざのあひて云々^{以上要}と撮^くて運慶湛慶が名をうちそてりとも生^うの二書を合て
ああくの安阿弥の作とりの^のをとくべ。佛師とりの^の狂言ふもすが安阿弥^{きよし}とそ
田舎人を賺く事あるも彼がほほ^{わき}に佛をぬのまへゆるもあべ

六 懸鬚

昔の男子の髪をぬその際の美一からとを嗜がゆ名ふ常ふ毛拔とすあくも既ふ客と招請
もうとみ烟草盆ふ毛拔とそて出へと毛笔と書院毛拔と云
ある者に墨ゆて髪を作り遺風近年まで町奴とのあつてよく人の知るところあり
又一種ぬ髪といふあわう毫の紙ゆて髪の形と製紙捻ゆて耳よりかけて編笠をおかぎ
遊里通の者あらぶ人目をあらび使とすうむのあうともい

中間の姿宿あすて此所をみる道具とあかたり或も長老の髪にて憲の奴とある
もあり云々と云え又西鶴二代男貞享元年印本八の巻土の数番屋日本燈うらりて蠟賣の
里童子汎の蓮葉をう色こそ見えぬ鞘とづぶ水雞も扣て逃る声めぐ人のるとそ
懸髪此布頭巾賣あど云々とあまが焼印編笠の類みて泥町の茶屋或ひ船宿ふく
貸も一うあまきもあらわあびつ作ア髪も併諧の發々ふあわくよとれどね髪
いと稀あり

七百五十韻 印本

前勺

玉拂金殿耳

春澄

前勺 玉拂金歛耳せくをミカミかき
附勺 久堅の藝の拂繩ハゲトキあらぐく 政定耳せくとあがめ
再按るふ雍州府志貞享元年土產門ふ曰「鬚毛丈夫の證あり故ふ男子能優の爲ふ鬚毛者へ假鬚毛と着假鬚俗ふ作鬚毛とり」と記ト又同卷ふ兒女踊躍ふ用るの具太鼓梅花
較室の木刀假鬚圓扇編笠云々と並べひざせりもみの假鬚毛かのね鬚と同種ゆて
原かぎき踊の具あるをあらがふ伎よりまが常の衣也ふも用ひより遊里近く臺あづき

元禄十七年印本「誰袖海」
ふ頭巾み作^{アシテ}髪^{アシタツ}
めやめうん^{ササシキ}拔^{ササシキ}出^{スル}せ^モ又元禄十三年印本
「俳諧三上吟」附合^{アハタマ}の匂^{アヒメ}「刺付^{ハリフ}」^モ大名^{ハシモト}の髪^{アシタツ}
この匂も掛^{サシタマ}髪^{アシタツ}の
ことよりよ^シ便^シ

七

淨土雙六 隨治良双六 治良紓楊枝 道中双六

めやめうん 元禄十七年印本 誰袖海 ふ頭巾み作上巻
めやめうん まとが抜出せとも又元禄十三年印本 俳諧三上巻 附合の句「別解」も大名の巻 朝叟
との句も撲巻の
ことりのよ便うり

七 淨土雙六 附治良双六 治良紋揚枝 道中双六

繪雙六とりのの漢土ゆゑあくよりわきども本朝ゆえあきこ書ゆゑよまも淨土雙
六とりののそ繪雙六のちどりあきそれまほの頃よりあをを詳あうむ俳諧の
叢勺ゆゑ万治寛文中よりわ假字草紙ふつをくらへ貞享元年の印本 西鶴二代男
み吉原の遊女のねびたすもまきて居ることをの條ふ「或まくせ撲火」に淨土雙六
ひよ罪あくうかきあそぶを云々又 初音草嶺大鑑 元禄十一年印本 ふ九月の中頃日待を
せし分明がまき宿のあぐまとて小あ淨瑠璃あまらるあごとまぐあう中ふの
ひの善惡ひうれでよもあらぬおぢやと淨土雙六をうちけふやうりんへおはるもゆり餓
鬼道へりもあり一人も佛みありたまとそようとが云 云 又 今様北四孝 宝永六年印本 六の
卷ふ 高下貪福世間へ淨土雙六とうほが如 云 云 又 野傾旅葛籠 ふ あの淨土

雙六すて居る色のあさ黒女の子云と云とあり又舞基室万人鬱文も淨土雙六を少车のうは事を載りもの二書の刺梓の年号は推量より正徳年間の草紙のものと云ふのとの事と云ふれど此節弘誓の船のぎき人もあくてあらちくとえり潜藏子元文五年印本上の巻ふ此節弘誓の船のぎき人もあくて九五の菩薩も毎日の隙を遷佛圖煥りてあそび居る云是等の書ひりをもうをりてむへるの雙六の流行りをおりべ併説の書ふりをもうを

新續大菟波集

寛文七年駿

前勺 月も淨土の道びきやせん 玖也

續獨吟集

從義應中至寛文獨吟集

前勺 繪とよても淨土のままで願もつき 重信

雀子集

寛文二年印本

附勺 雙六とあがき夜もぐわわく 同

今様姿

寛文十二年印本

附勺 芙の着です一き淨土 維舟 正次

前勺 十方もまか淨土すどうく 同

附勺 雙六とうほくあの月や月の下 同

此勺撰者維舟寛文二年吟也

大坂独吟集

宗因判延宝三年印本

前勺 たゞとさや同シゆうある佛がう 素玄

附勺 十方もまか淨土すどうく 同

江戸大坂通一馬

延宝八年印本

前勺 都率の内院出からうの者 梅朝

附勺 術忌もあい淨土雙六もじまきて 同

前勺 りそぢや月や淨土もじまきて 言水

附勺 来そぞ花胡粉緑まわづむて 梅朝

○双六もか色どりするの西胡粉緑青と附り

西鶴大矢數

延宝八年吟

前勺 梵天國より細引をひく 西鶴

附勺 そとあられ淨六雙六員もくば 同

又寛文九年梅盛が著一たる俳諧便船集の附意指南ふも地獄との條は淨土雙

六と載りまして此雙六も南無分身諸佛の六字と四角わくひも六方の木が書いて

日安と一南闇浮刑よとあらゆ一めき目とあまが地獄へ墮すとき目とあれば天上に

登り初地より十地等覺妙覺等を経て佛ふ止るを上まともろの遊戯あり

其八二

○此處あぐやまわ



為一模

諸 めぐら



諸
八
九



諸七
一



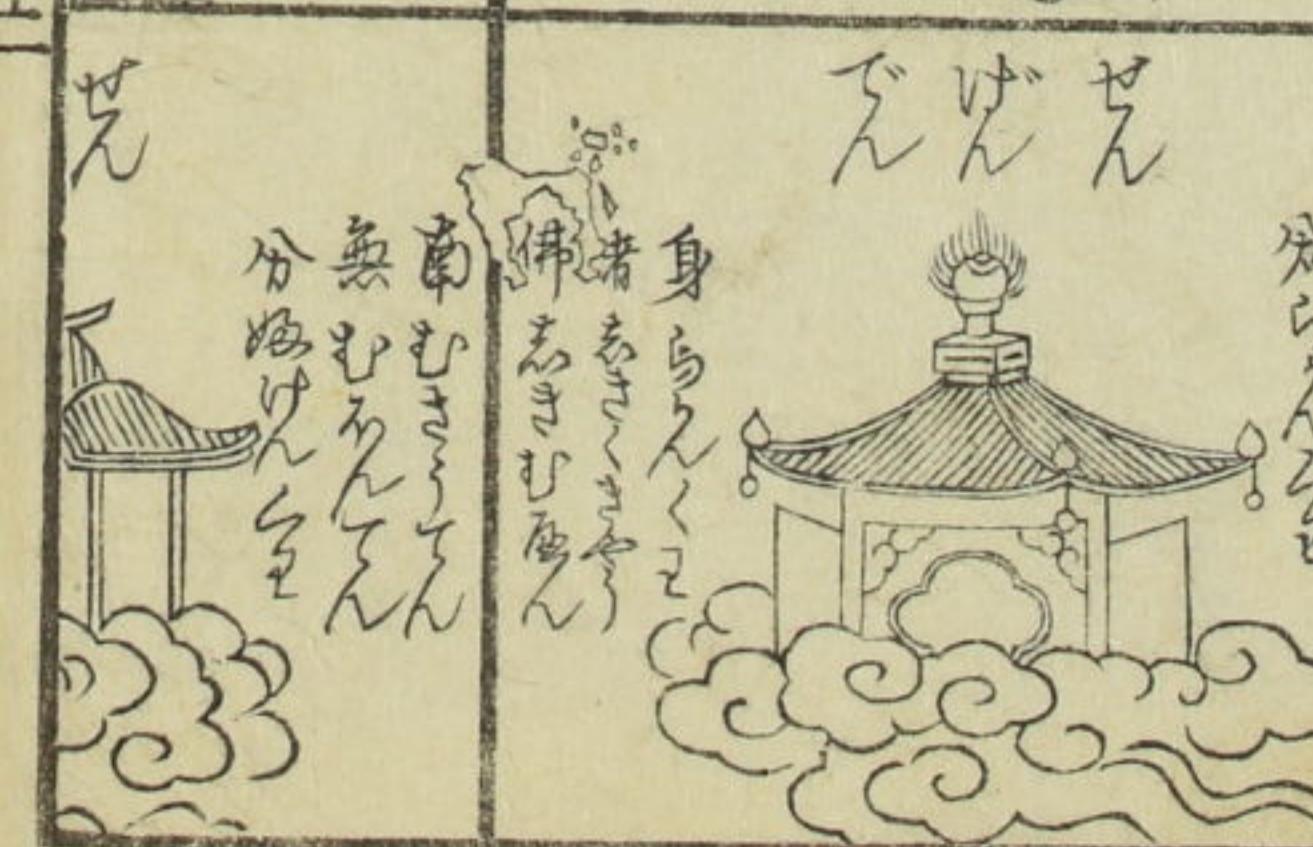
佛不思



諸九



無むむむ



佛あまきひゆん
南むさゝてん
無むろんてん
分ぬけんを



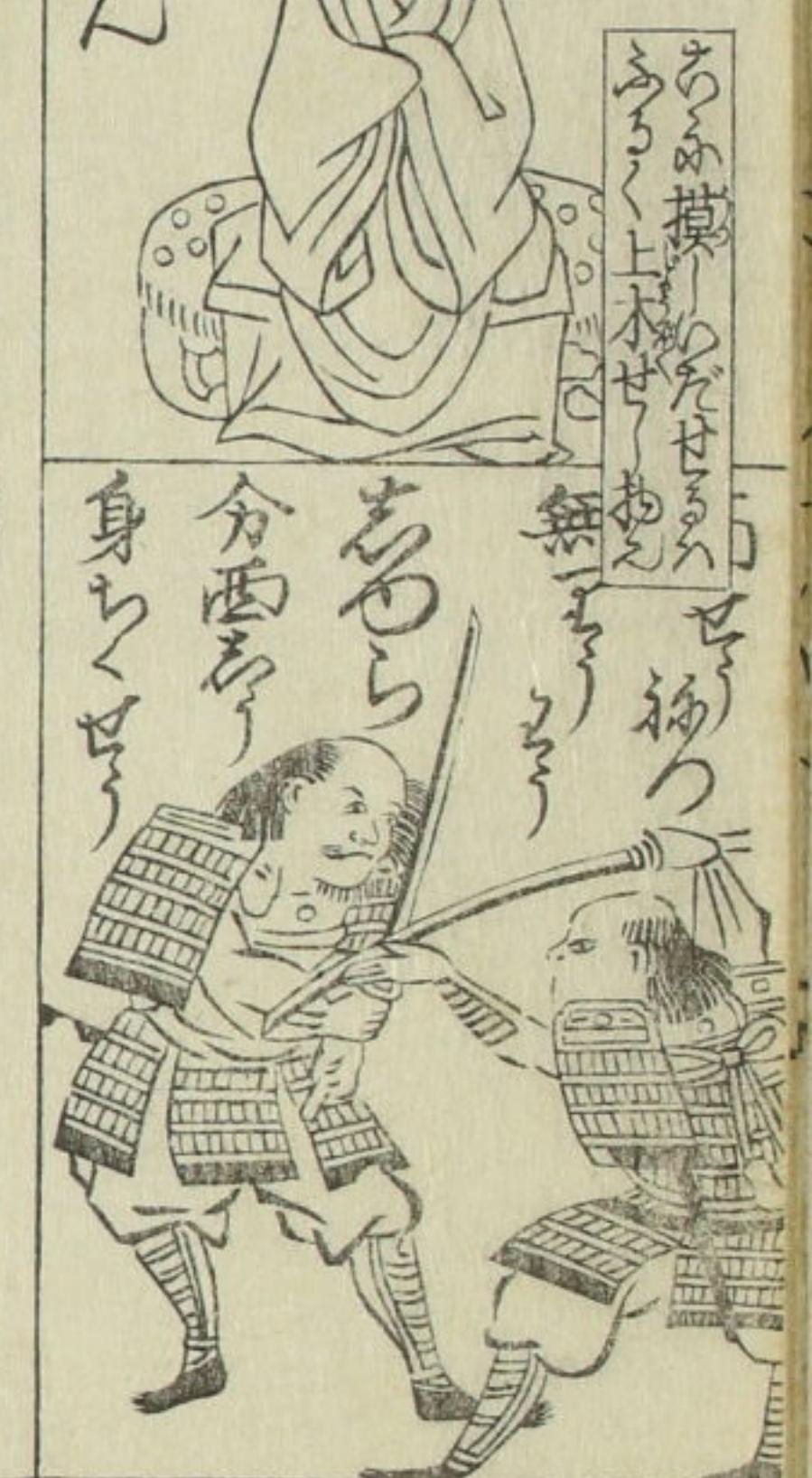
無二
分也

名目双六
ハ天合の
各目を集
めりの半
縛双六より
あるも
今も仰行
のあありて
佛法双六
といふ

此雙六の起ふ種この説あらずすら漢土ふ選佛圖とのあわりそまを写すもとす長胤が
名物六帖ふ五雜組を引て選佛圖と假字と附すりまふ載し 潛藏子も此説によると
遷佛圖の字と用ひる。又一説徃古より名目雙六とのあわり是れ初学の僧ふ天台の
名目を号とせんるよ作るあひて弘安中の或書ふ未學の僧と罵る復ふ名目双六も知らずぞやと
りふとありとぞ是れと繪双方よひをあわしく起りとも云々又異説昔熊野比丘尼が地獄極樂乃
繪卷とひよき婦女子ふ投華させて繪説せしふ思ひよせて製しとも傳へスヤと
とりの説是あづんば

無南

又種



南無分

蒙古文



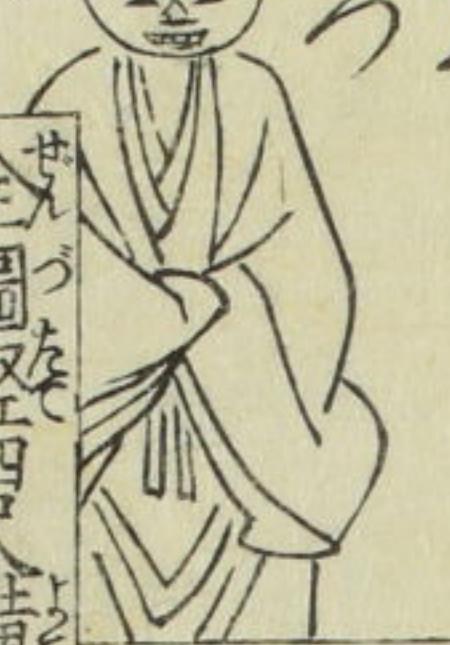
佛諸真

南漢游列

卷之三



分於至天
身也稱
西帝



南こうちや



南佛無十地
分初地

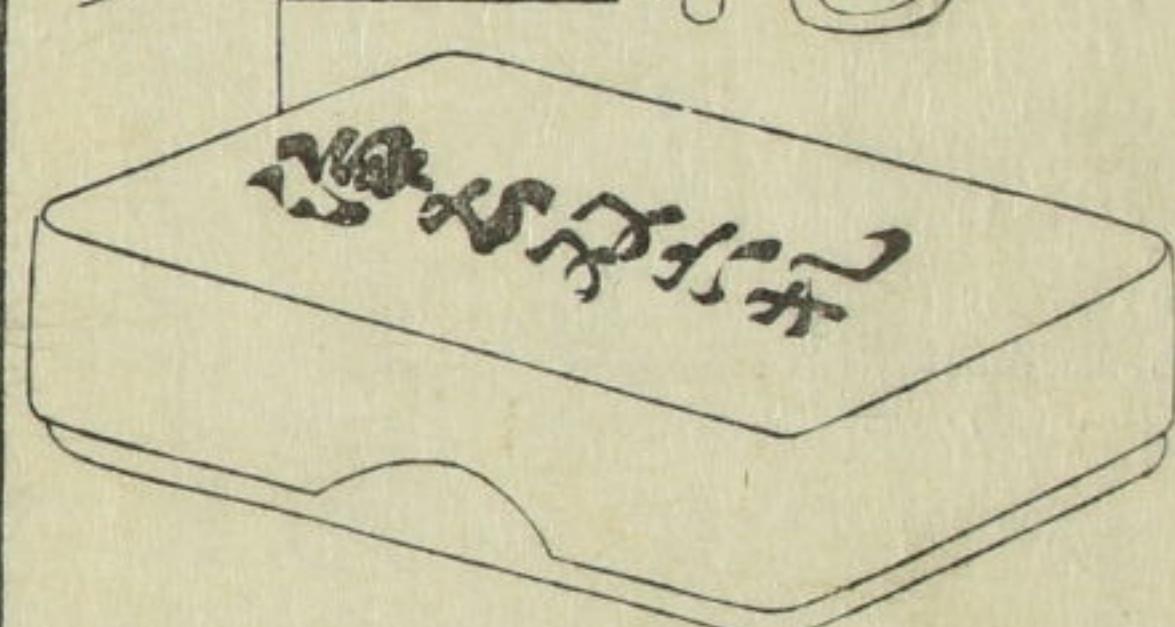


金匱要略の類書彩色以前の古画を以て之を追ひ掛ける
万治寛文の書籍目録掛物の部に淨土雙六と載るる是もあり寛永正保のは梓刺
せりのあぐー又延寶天和の書目録に淨土雙六。同中。同小。とあるもの又六いふ。
流行てゐるよき抄略一或ひ縮圖一をを彫せり。又ビ又貞享元禄の書目録に淨土
雙六。同懷中。道中雙六。野良雙六。とあるべ出せり。懷中とりのり前の中とあるよ
く。道中雙六とも當時貢享もじりて製成した野良雙六も延寶のはより

其証下ふ
天和の書目録ふ誤て漏々みやめうん
因云元禄十三年役者評判記談合衝の序ふ
天目水一盃のうり六云もとをひまどりとぞ宝永四年近松が
作の潭瑠璃ふとくする事へすとふ前は弁ひたり又正徳年間の印本
むかゆ御指をとりどり絵すと六とひふかと載享保八年の印本
鷦鷯万葉集ふとくする事へすとふ六とりと戸節の潭瑠璃もとくあるをそ考るふさきふものひとく道中双六の貞享
の法ほう生一宝永正徳の法ほう専流行りのあべ

江東の風

文字如此 金粉墨此時
箱の外 黒塗裏雲母引紙
布目地 梅花の紋あり



或人淨土雙空のれ古呂の内を北藏と
牌へ紫檀にてぼくアト花鳥を當時繪をう
あらわしご小兒の玩弄みうちりとうぞ
此札をかのとくが目印としてかの雙空を
うち廻まつてあらべ
画の大サ堅四寸九分横三寸六分深サ壹寸
五分ゆ
金粉にて時より書跡ひと古雅ありすき
うためて上みせり

板西村屋



書肆永壽堂みけ抜乃入うる不存あり。懷中とのひのゆて元禄の所乃
膨うぐべーあく坐く古画及あく印行せり。ものも絵の所九十一箇ゆ
あふ摸本四十三箇ふ披略を全圖豎壹尺横壹尺五寸ゆ
京都の俳士伊藤信徳江戸ふ來り松尾桃青山口信章素堂の実各と二吟の三百韻を
僅モ于時延寶六年足と江戸三吟と野て上木モ其卷のうちふ
前勺 風膏く 楊枝百韻けづりん 桃青今から附之を傳へと
附勺 野良や鴉ひり絶れうきりも延宝の調度考證を傳へて
又附 舛六 内喜謹考證の如く而て傳へて
は附意を按るふ揚枝小野良絶揚枝あり 紀子大矢數延宝五年独吟
前勺 息のこぎたも伽羅のかをもと附勺西鶴大鑑貞享四年印本

卷之三

十五

七の巻の「えびも鶴や筋の根本浮世楊枝とせ茎脛もれ元の定紋をうちほひ西」
そもくのむすく甚まに極のからひ乃びが死人せあてもんの壁へはひひじとよみうれて
云」とあるをじ合て考べ。さて野良孫の経とひふ雙六と附る中て前の書目録乃
條の論が「ごく當時延宝を既み野良雙六とひすをもぐべ一擲去双六乃ひ善薩摩も
野良孫ひの達婆た稱まかげじどり吟みては三つの瀬り延寶の首をくらぶ如」

類桂子

前句 渡アシテ 勢マサニ もシテ かたをカタヲ 其角
附タタキ おきアキ でアキテ 痘アキ やらうヤラウ 双ツノ
やハシ うウ まマ くク 琴風ギンボウ

かあくもあきが野良雙六とのひの元禄の頃までも存在せりあくべ
八 爭留廢節の己原不安を一事

湯玉玉管の麦川ノ僕事
おうるゝが
津彌鶴鷹也節より何某の侍女小野阿通がほく十二段小起までとて後も知れ
十二段小起との説あるをゆべ何某の侍女が作といへ非あらえ其事

卷之三

の説もさもゆべ何を
せう
天文九年の吟慶安の印本及
こまわり
古写本にて参考

前勺
附勺

いとくたふ産さ
まごひの枝はれの
かどきとり少めりと

。産せふ津陽豫とかみと附
又津陽豫ふ牛のあと附をう

又附 もとよりちや時へうへああまで
せんく とめらるが事するり おこなれ
千の早々あり當時津浦島の流移しゆ

（家作）
何事か天文元年の生えは千勺の刺僕ふ九歳阿通との侍女へあやもやせん津端薫との翁
幼稚の者を慰めんとて綴りやもともと最も不審ことふらひどり一が又一ツの証をねり

さるをくけんそうちゅうりき
柴屋軒宗長日記

て月見えがみてこよひ名月ゆとばかり出て菊の緑の枝よとおぐり脊と
やまみちひわちむとくちむとくちむとくちむとくちむとくちむとくちむとく

あよひ月またふ夕とよとやあとくぬひもとひへらの一室ともま
旅高アドタカたまアトマタマる。一両輩イリマツ人ヒトをほくら 少産シヤンひわふ。峰端カミハタ鷗カモメと。うるせ興カキヨウじて一室イリマツふ
あよぶ。或オカルとまのあくろ。傍カタりとそかのくたちあぐまよわまカタマりふす下シタふおがえて菊キクに

はれてあと傳やる
たゞ称らそよやせぎり免^{わかれ}をどどよひの月のあよびて見る
その名綱さびくあひやうべやがてむとあぐもむくをくもく

毛元かく

十一

くはもあくをもるく、れんじとて、むすびのて、月みて
は紀遊河内守にて書るかまが止當時、亨祿とちや田舎とらひする小庵院乃
くまとわふて、津彌彌ハあるべうやまとらべ、亨祿四年ハ何まうがすくわまうり
何まうが侍女よ起るといひ、説の非あまといふと、智
宗長ハ天文元年三月八日卒と二根集よ
と曰ひ

九 キリコ燈籠

新撰大筑波集
山崎住宗鑑撰

附勺 生木 もよてけむるあらわの火鉢

あらまよあらうとおもひふが今ひまわらやぢらのとよとく捨まのとよめりやぢらが
まき き くま ま せふ く こ みく
生まよちゆゑ少氣にく撃よが物んとあの小窓の外と火脚の外とあら附りあり

さて梯の事とのがまむらとのふが中音よりの俗語あり今もごとのふす。へのがまむらの
率タマ
上略アミて。もと踏ヨミギてのがま横木ヨミギのとえ 長者教チヤウジヤキ
寛永四年印本写本のほど用板ヨウバンと
奥書オクシり。按スルる。室町家の法の俗書スムシキ。をえ
ちのことを一つ。かわづふのそぞとニツカわづふのそぞと二つ。かわづふのそぞと二つ。
正章独吟百韻マサエノヒガキヒヤクモン 寛永年間吟カネヨリノニモン

前句
数え
浦を
うく
あひて
百万

木の根の下に
かくすての木の根の下に
かくすての木の根の下に

さて。ちの子。あらうの子。ともとも左右ふ親みたゞべれむ對よの名

のとをもあしの子ともも同意是よりうたりて總て四角ふ法く格子すうのを祖子ともその
角を切るが切るあり。切へ隅切角の切子へ組まの子ありと解さむ。論かうじ。昔よりきよと
の字論ゆを其角へうそくややひえ貞享元年自筆耕せらる。蠹集。ふそく片假名學事

十 喉^{のど}が渴^{うなき}とりの諺^{エビタキ}

身ふ應せざる義服を著する者を嘲みて喉が渴であらうとの諺への年も人へあふ

多方の上りあうる屋言即ち扇のうちふ大坂社左衛門の勘定がとればにあらえども
金をじるわやまくらみ瓢金の浮世房あらもちくと空あまて云々又

東海道名所記

万治年印

山越と夷屋吉郎兵衛大和屋六兵衛村山又兵衛は三兵衛が太鼓をうちたくそあ

かくのうちの勘太郎

もろすら

の腰筋とすする云々

あれと四條川原のくづりかねえす。又

都風俗鑑

延宝九年印

本杏花園

ひく死絶さまでかづて女がとすのそりか今何若仕出でるゝと

髪をうきてうぱうと名付てうづくあらでうべ云々

とひふ事を載つてふ摸つたあ

吉扇

兵衛が圖へとちひきてうづくとアキラがくまとどかの手帕をうのあとううちかづり姿あぐ

りて考ふ御坐て着物は延宝の元禄中京都の俳士林鷗が著く

産毛

本

杏花園

をあむひ寛文のまたひだり也元禄中京都の俳士林鷗が著く

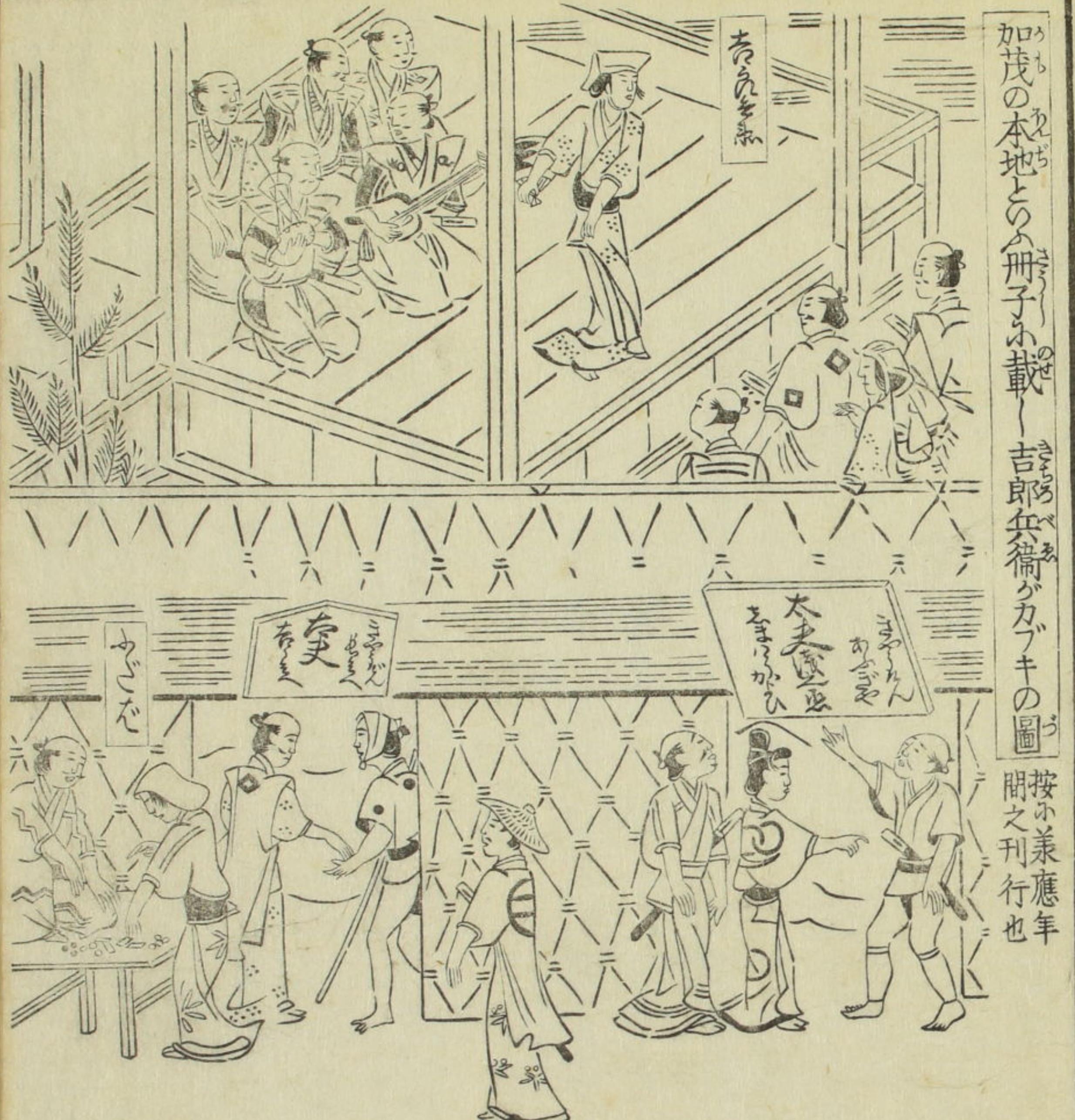
えざえがまちきいろべゑやをてる

極二夷屋の吉郎兵衛が扇のよの名のくわまで土の中へ骨もある」とあまが當時まで

人口ふれまへ舞の上手を

加茂の本地との冊子小載——吉郎兵衛がカブキの圖

按小美應年
開行也



河原信達筆の歌が著舞曲扇林
ふ前せき居の初りへ材立と
そよごう中村勘定房太和
六吉恵えびもや吉翁と義
あひとあり

○土佐ふもあと外紀みゆき
すゞのうひのと
津瀬瀬とひどく昔
かきのあら名が唐木と
舞ふも傳承とて傳承
八角扇。わく後半かど
の古紀ふも見えて
是けせりとこのかほ
次の裁
意を身の程み
高の袖り一
ああ

卷中ノカノノ上ノ巻
 其角が外によう一任喰うり又都老子 東都名張湖鏡編 宝暦三年印本 小曰
 配膳の調度も殊の外義とほく一金銀と鏤めどもとある。答是ども食膳乃
 家にも蛤の貝殻小飲食を盛て供するも又云とあり按小五節供遊び小首枕小准云
 著々不思議物語 宝暦の序云雀海中ふ入て蛤とあるそれふよよてば也。漫うそと實り
 行邊ひうそもどうすとあひうても蛤化して離の枕もまく実の離枕云此文の義を
 級くなる器中て傍そり蛤貝の枕と用ひうこそ寔の離枕がわれどりのゆやわくん
 又。黛山が評一たる前々附小雀又枕と化して離節供と云ふたり是も又とく
 字小月令の古事と傳せ蛤とのこと略する利やうは帖ふ辰の八月とひて寶暦十年を
 ベ一傳する余波也。又云内田順也が俳諧五節夕 元禄元年印本 尚齊藏書 二月の條小桃の絵楳
 同柳木地の櫃小桃柳と画内小草の餅赤飯もりと脚臺匙との小物添毫少へ繪
 ちつ不。是五器より木地の挽物又絵わりと記す。まことに離の五器のあまにてあらモ

ありふ木地の挽物の漆器とあり。綠青繪えど画うる時繪の義を盡す。ふあり
 たる寶暦の都老子 小をひとと云ふ。享保元文の法起るを高貴の人と別のよされ
 美麗あらそあく下うわすくあざ

俳諧坂東太郎 延宝七年印本

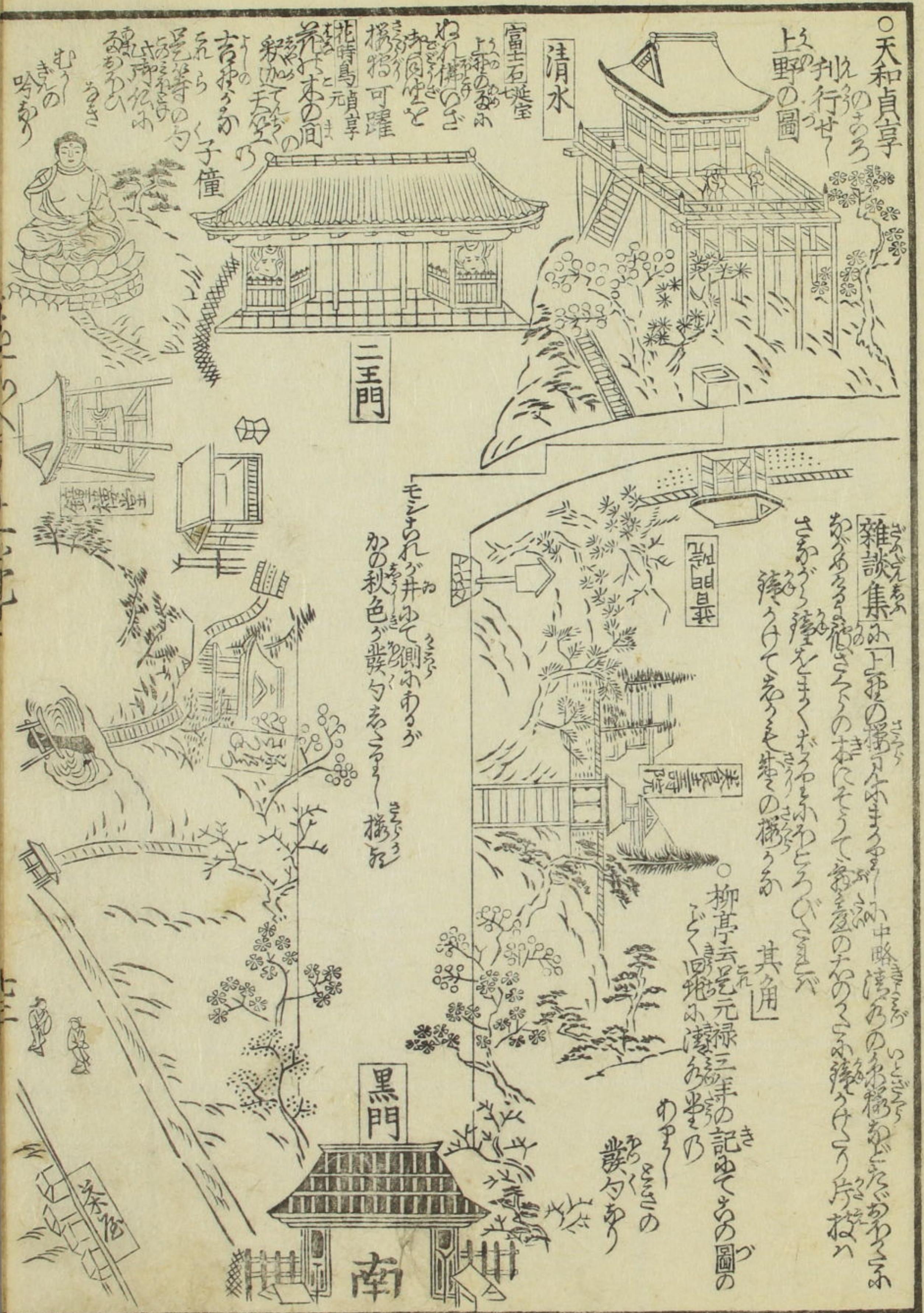
調泉

是さむありふ如く高貴の人乃離在びどくふ。常の手具足ふ。前後あら絵
 離のとくね出して飾まへて離の具ふ。あくびうる

[十三] 秋色櫻

俳諧とりて其名を継ぎて秋色ハ江戸小網町菓子屋の女あり。幼名と阿枝と云
 十三歳のときト離のをす。まよて清水堂の毛井の湯ふ。あまく大般若と云ふ
 楠を足す。井の下に乃櫻のあ。酒の碑」とほぞきこみぬ。あまく。う
 その桜と秋色櫻といひ。諸書小載てたまく。も知る。その孫あり。其姓乃老
 樹を植す。今こそ。を。延べ。お孫を植て。秋色櫻と。観音堂の辰巳。下側小井ゆ

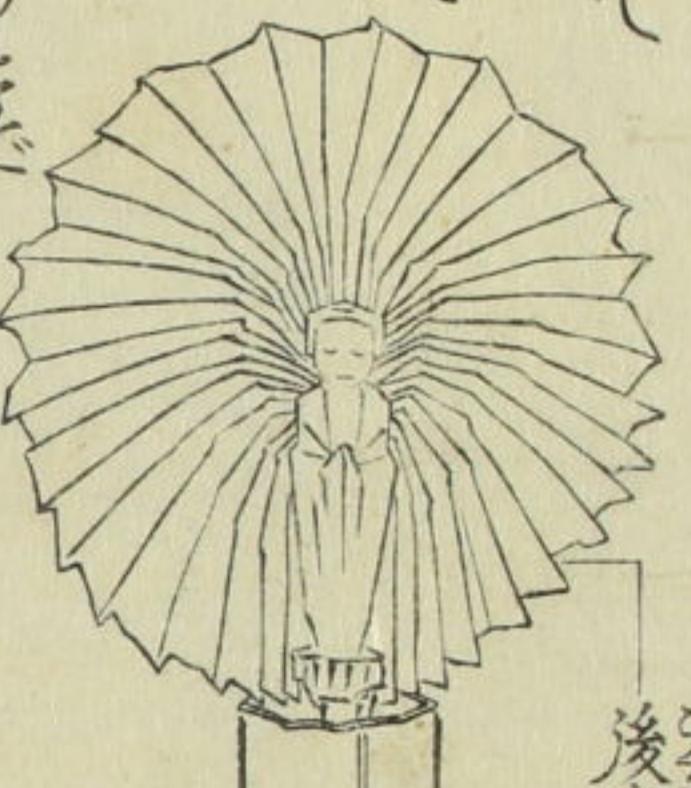
井も御供所よりの入所の板垣の裏もあり昔へは垣に立つて有かる事幾々とあつてあは」と
云ひとすゞ考りが此説あだはづか其故もくびれて觀音堂を後されへる元禄
土年あり寛大より貞享中の江戸絵圖及延寶の安見之圖等と云ふ二王門今
山門の東今俗小摺鉢山とりへ至よ此觀音堂ゆり再東叢山の古圖あり印行とあく
参考せまぶ堂の南向ゆく階へ西山あす石階をあらうむるに至れり井のわすれとすすき室今
觀音堂の北を養寿院あり此寺内の景をとくでまうけへぐるましむれど沾涼が記す
觀音堂の意大般若との摺とあまび養寿院の意をとさわづら也此古圖が觀音堂の
通の葉を拔乃にて石盤の上にあらうが井坐てゆましとすれうまし今秋
一念さうきうち秋色へ享保十年四月十九日没行年詳あらうとじ男女の子のまことひままでふ縁もあざ
彼が天死ふゆづることを論ありまづあるみふ没年と五十と云ひむると在六十三塚へ延寶
八年ふゆづることを云ひまづるにはまつてそ其時代の調も自然とあまくもあまく
かの摺のづあゝの内へ延寶の調ふもゆづも今の北小摺もまたせりつぞかそらくも
後人あらうとほくして附會の説をまうけへあづべ



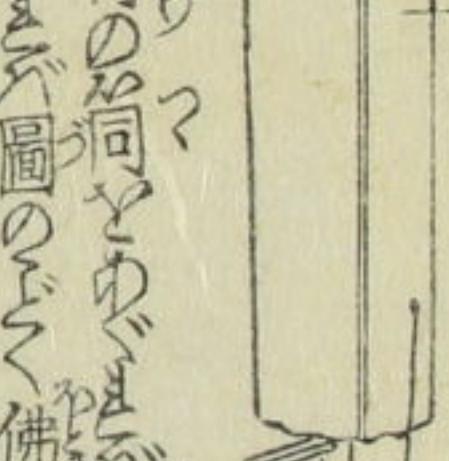
十四 来迎賣

或老人の話かむり小兒の翫弄の佛の像を紙の張貫入も本ほほはア升の箇の
裏とあら其竹の筒をさざみ六紙ゆき重なる後光ひきて佛もとのふあくらき機振を
藁苞やうのちのふすあべ星とうちうげて御来迎ことと賣まくるより
○あまもも人の筋すうて
ほすくる圖ゆく
古画にわゆ

佛の強ねきゆひ木
あるひと土あくはりもか
り星破魔うかが
尉姥のさひありとそ



此竹の筒やあくは佛も後光もかくらきの筒を
出でまし六圖のよく佛のゆくととのは後光の
ひくからうあり



竹の筒

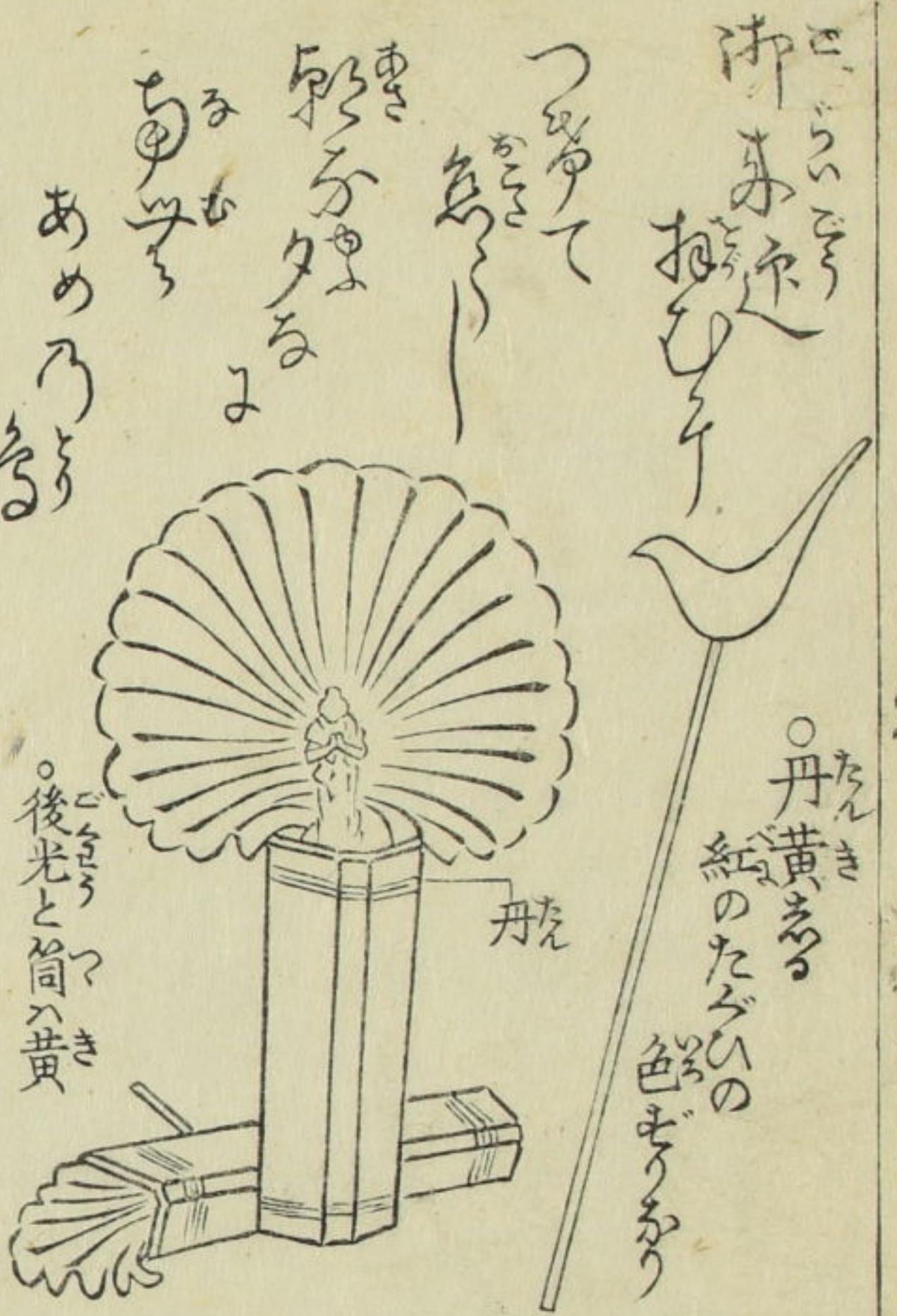
為一圖

中古風俗志
新見老人の昔の物語を伸慶と
り老人明和元年増補せし書
ふすまくのよく佛のゆくととのは後光の
あも。まく。鈴守豆太鼓。ひく。おきあぐり小法師。あの小法師のびまの時すらお禪家の
そく。だま。大師の尊形とあまく勿躰あまくまえ。鳩車。板の琴。御来迎のかくうと
中古のねあく云。中古とえのの法をさしてり。元禄のあくはるやはるの添行」と



こらいう

正徳享保の比印行せし絵雙六に足をくる来迎賣の圖え
正徳享保の比印行せし絵雙六に足をくる來迎賣の圖え
江戸ゆく編一淨瑠璃あり。正徳五年との再刻の年号
又俳諧江戸名物鹿子印本
「御来迎賣」
「お供や達てかくや」
「素濃」
「とくゆく画へきや竹をうきたまく摸へせまざま等
升の筒をさくらかくうと升のあくう生かくらく
話ゆくて画せるよの圖ふく合す



此圖はとく安永二年、舞形屋まきや刊行せし江都画えどが
日本画にほんが。人物をうつすて江都二色と頗マ画ま重政
贊さんも弄籠子なぐらことかく。名寄なご老人おじいの筆ひ。
人ひとの姿すがたでかせうまそゆる。今自刻じこす。あま
ス或人のりふ明和七年再開まわ來迎らいぎ。翁おきなとを
れとあう其刻ときハ佛像ぶつぞう矣い。らも赤き紙あか
日ひの出での如ごとく。鳥とりを画か。わすとを
是富士山はの行者ぎょうしゃ。日ひの出でと御來迎ごらいぎ。ふ
りとほきての舞衣まい。やめうん。おの宮みや。祭まつり
古いきをかよろて画かるもよ。

[十五] ひとと煮ひととし 附須彌山

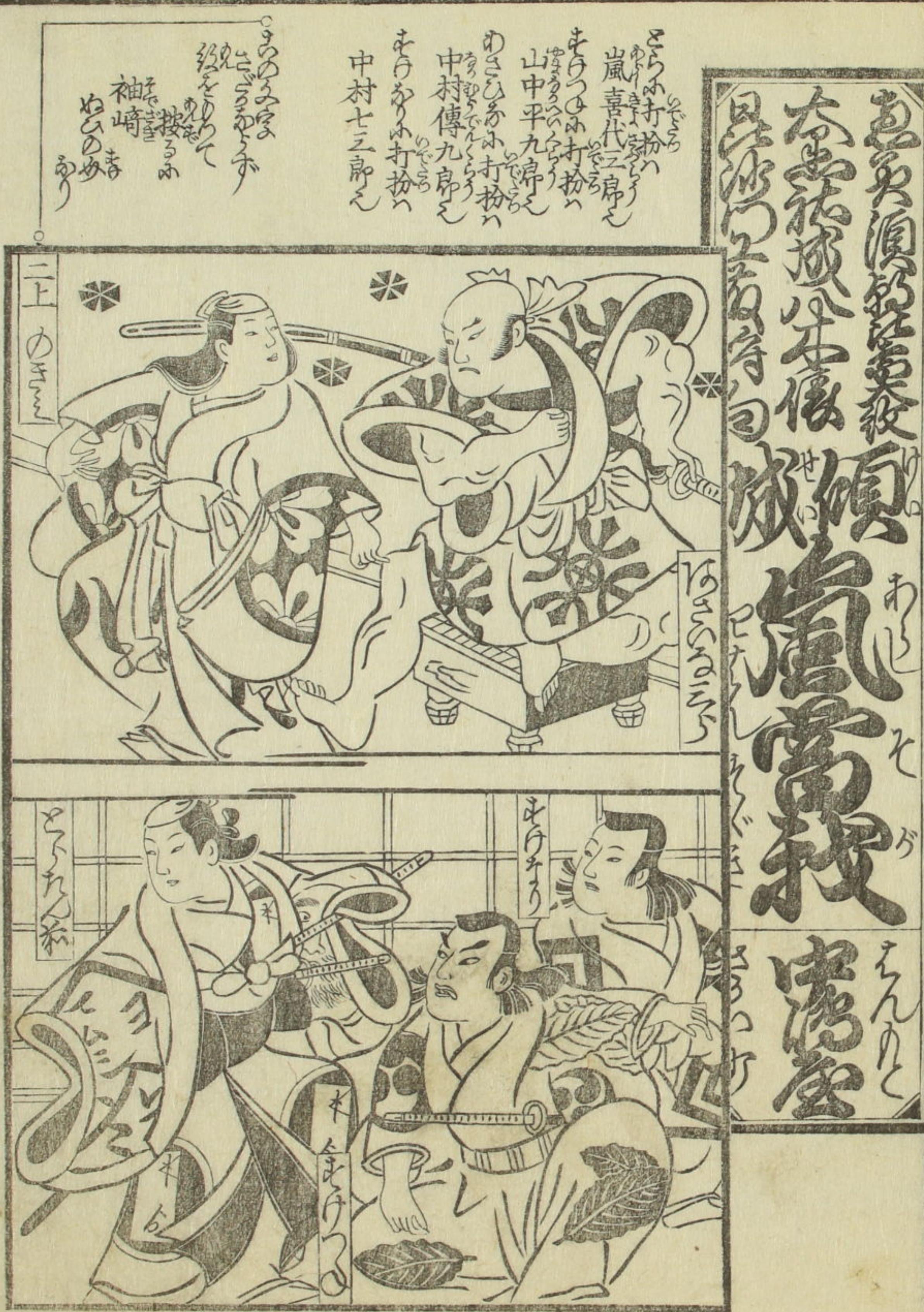
料理物語れうりものご 寛永廿年かねい 老父おじいの歌うた「ひとと煮ひととし わぼき。牛房。芊。大葱。豆腐。せき。」
印本いんほん 中味ちゅうみ 咳くふてトトかゆふかひくふにまうふふとようひととみお」とあり追おと小葉こは
甥むぎふ傳つたの通とりと從つづり經よと名なはけけ。あべあべ。昔むかの小名こなばる謎語なぞご
のやうあるがまがま。因いん書しょ汁じの歌うた「あやせん 菜なも豆腐とうふもいふを細ほ小こさうたるをの
今いまがとと付つけとと豆まめ」
男重寶記おじゆうひ 元禄げんろく 小こ雜供ざくくわ「さくくわ」の字じと當あるへようようざくへ菜なを
切音きりごとひふみて。ナホナホ。ヤツヤツの類たぐいあり。もふ引用ひきよし。料理物語れうりものご 小蓬汁よし。トロギトロギ。絞しお。

ざくくふきふきと云いふとあるふくふく。知しべべ。此書かごとく。汁じの名目めいめいへ又また言いふ。世よ記き。兼應けんご
印本いんほん 明暦めいげ一年いち 四の卷よのまき。小蓬汁よしを振ふ。而とて。ままでふくふく。おややの草くさ。皆みな虚うつ草くさ。
兼應けんご。切きくせせ。もと世人じんじんの胸むね。ざくく。汁じ。ととり。以上じょうじょう。と。あま。ざくく。の名目めいめい別べつ。豆とう腐ふ。

[十六] 八百屋やほや 阿七あしちのかぶき

かぶきの事ことと書かる 冊子冊子 小寶こぼう 永五年えいご の春はる 埼さい 町中ちゆう 村庄そんそう て 山嵐さんらん 曾我そが と 頭かぶ まろ 狂言きょうげん

山風喜代二郎と云ふ女方阿七の役とはども是を阿七がことをかざさんあらわすものであり
かの喜代二郎が紋丸の内小射ドヌあるも君今にきて阿七の狂言みは紋とはう
寶永五年ハ阿七ガ九七回忌ありひ法地藏坊正元と云ふ者江戸ちぐみ六地藏と
建立モ俗の名を吉三郎とのひきゆゑ吉三道心と人よぶ是を七が菩提の跡ふ立一と
り評判を狂者依者津打治兵衛が七が志をひり男ハ吉祥寺の小姓吉三郎と云
ひて古ニ道心まは老年中天和の才であ地藏二軒建立の事一と云ひて記して
作まゝと云ふ話あり按るふ対ド文の紋の喜代二郎に起まゝと云ふ説は是
人のよく知る話なり按るふ対ド文の紋の喜代二郎に起まゝと云ふ説は是
其餘の説へ云ふ非是と云ふと貞享三年の印本五人女四の巻ふ於七がことを載て然
急きる男を吉祥寺の小姓小野川吉三郎ふほゝ又寶永元年紀海音が作八百屋阿上歌
祭文と云ふ淨瑠理も彼五人女の人名と仮用ひて原来吉祥寺の小姓吉三郎と云ふ
偽名ある事ハ論あさきどなぞやく貞享の冊子ふほゝと山風曾我の刺小津打治兵衛
新ひ作りまゝけ一かあも又於七の狂言と山風曾我ありと云ふも誤あり



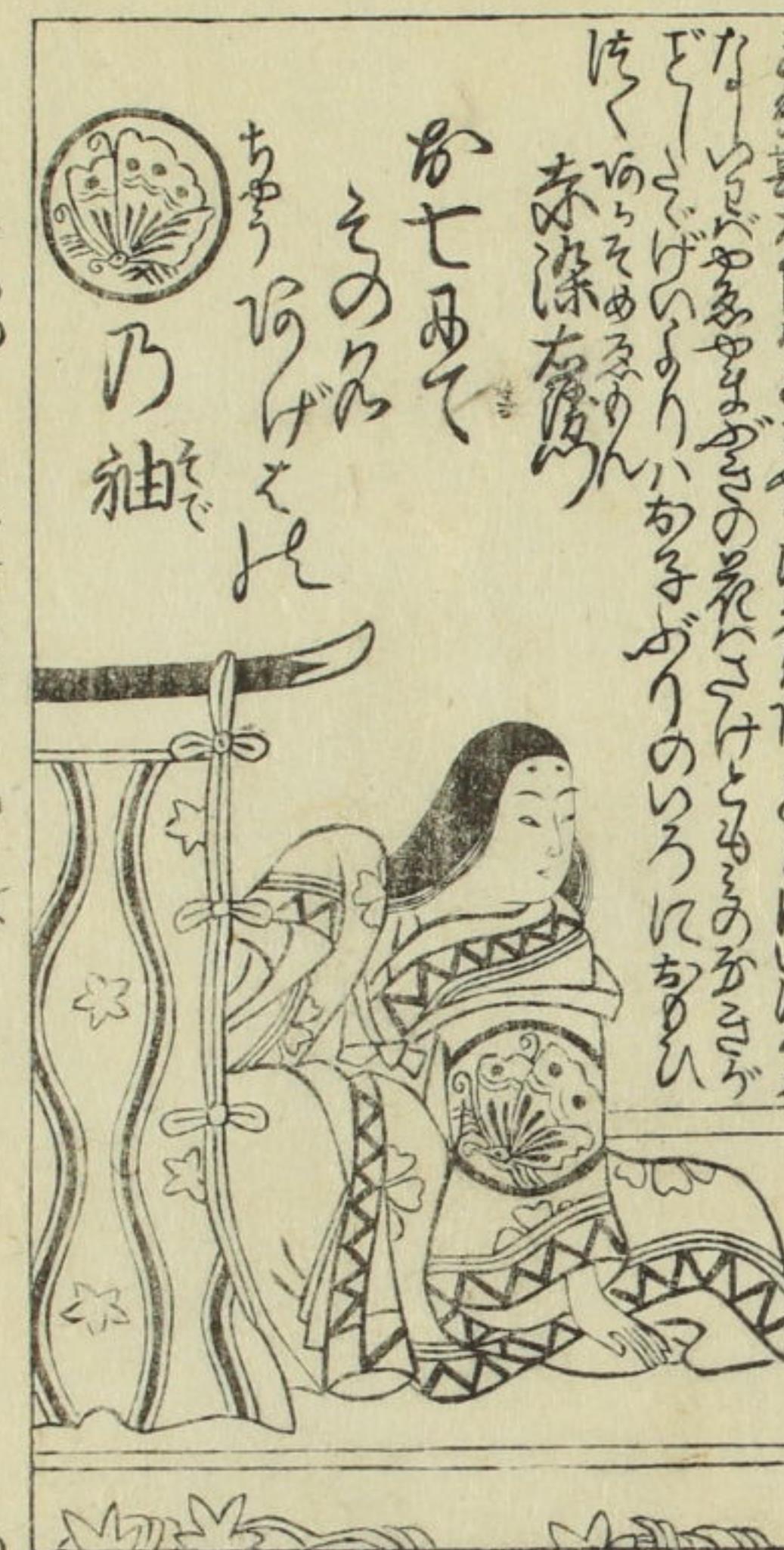


標題

いと興あひ八百屋お七ふす拂りの嵐喜代二郎坐て実を中將姫めうゑん寺の小姓高安
吉三郎にす拂りの袖崎縫ミ助めて実を唐橋宰相あり画中ゆゑ憚るぐき實のまみ
摸一也も推て知べ。又云正徳三年閏五月十五日嵐喜代二郎没。法号華財坐す。其後は
享保三年市村座ゆて富士の高根とふ狂言小三條勘太郎八百屋お七の役をほともす刻
未だ二郎が追善のあ被葬代を弟が晝夜丸小封文と角ふ狂言ナふ流行今に至りとお七の
かきみへ以はれどほつとく種の冊子小名をかたがしとくね話かねど華の序小書哉て考る



○享保年間小刊行ある。役者三十六歌仙一名を演男妓離の内裏とくふ冊子自此圖あり



○享保八年の印本「音鳥鹿子」等
浦井喜代名あり。彼が作はれ。お七の
母の勘太郎があく富士の高
根あるを寶永の度と誤てある冊子の
紀もよきゆく混乱せり。また
上ふ摸一牛く圖ふ狩文の絵乃
てくふねぎと勘太郎がお七の
程去る。喜代二郎にて流れる
禮ともべ。

寶暦十年紀逸が黄晉日記み「三條勘太郎がお七も程あくその母と勘太郎もく
盛衰へ嘗めことかがく勢もく情欲も」とりのこも。因みに延寶九年乃
印本「吉原三茶三幅一對」ふ橋屋内夜更名とくふ花女と評する。面てひを程
より三條勘太郎に似てゆる。此君と勘太郎がせき居てかく誠の女形ふく見え
たれ云ことあらがひの享保中を亦ふ經て。勘太郎の故人の名をゆくものあぐれど

ナセカヒー上巻
延寶中のかづきの書今ぢやく傳ふ所が詳み考ぐる者ち七の実の紋と何ぞどのふ
三ツ柏あり天和笑委集十一の巻み「七がりどごりあまうごくゆれしよ羽と重白山神宇州
郡内の碁盤嶋ゆきのあてて縦さう定紋の三ツ柏五所よほけりひのうちほけて
まえ五すの太振り被うふかきの様ちぐひうき紫帶あくへふをと引まくうふと
結び笛丈あ黒髮あすゞとうやにゆひあげ銀あくまんふ時繪うふく玳瑁の櫛みそあ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそそそそ
そそそそそそそそそそそそそそ

十七 梵天國附六段目

むうの淨瑠璃ふ梵天國と額もうわり梵天國の冊子ふうりて作さるゝあり
のうちふうり足利の書よく親利の代に作らる書と
まの津彌彌へ慶長元和の比河内。左内。南多右衛門等がかくらむ出しひ
徳りてをく貞享元禄のうちふうりとも虎屋永困天祐八をまあんと津彌彌の祝言ふ

か第も此梵天國とかうることを競ひ童を祝ひとぞがど
程のよとを梵天國をうふとのひ又うふとのひを略て梵天國とナスアヒのト
ゆえず洋語理々絶えうきて此諺のうのナの筋ひをあく
たまくタマタマトタキウタヒ印本 延宝五年「人の心をいゝめ若しめのれがよもとびとくと
人まの仁の道みちもまたりかう男の心せとうてあざれの風情をのつみがくよう
あねほんでんと急ぐものあら云にとあつたりとも國の字を略風まろそらの紙齋ふ
比て身帶の減却もうといふあり又浪花鉢 延宝八年六の巻 紙町の在女の匂ふふせりと

いふやのやまとわかどりのすとでよびせねをあくべんでんびの下地ぢやと
ありんせえこまよそその遊女の許へ寄の來くぬすふあれをま見えし京解の作
浪花證へ大波の作
吉原三茶三幅一對 延宝九年よろ 定家とひの遊女と評ある句は「容顔あつやどよく床乃
うちあらわもしてゆうくとむかくとあるとがんでん國とゆうゆのと云て
又古郷帰江戸出きみ 貞享三年よし 六の巻ふ傳残の圖に首だけはうやまう頭をたじのせを

たきゆびて桶伏ゆありやうく あごものひがひて逃至一飯アリテモ主のかえりアレモ
もぐらがんでんぢくさう云上 紙ハ社命のことをアリ又 松の葉印本 元禄十六年 ノセ
一宿かみ。とふ山廻に「けふさまぐのたまふとふはぬくくとあのんやや中略
かづとのさどものきえちやくをんぐの。もどとひづのまがんでんあくふあくるとでも
のびくへむせまし」元禄ハ梓刻アリ一 年号キテ 延宝天和あるの山廻アリト
とふひづ意三幅對 と同かれ、其原 上み披出せし冊子ハミアキナシセシガ
き淨瑠璃より生て花街の添言にてゆきありト 遊里のことをアシケルモノアリ
座敷狂言 元禄十四年 ト者ノ角小二月ニ月をやまくアのノモログやらう その節ヘシ
印本 あそだぬもがんでんさのをうくまうが云此冊子と 江戸咄ふうみとあくをアレギ
淨瑠璃とうふとりアトアリ。今がでん國をうふとりまく其原と知モゾテ訛ミテアリ。借。
前ノ宗長が日記ふるをねう がんでんぢく あくうううがぞ
望 今たまく傳うる梵天國の淨瑠璃本と云ふ細字ゆてとその筋ぐへ筋と契うる是を初め
永開八丈文等ア正本と稱アリアリ被津瑞應の古殿國の経に

もくじて日本の方考へせんとぞ又大おどろをうさんぢやうからへてまほり
がんでん王のぢのひのぶとんをおそく五でうのあのもうむんみてんのまよとひま
こそまわらあくどをとどめあぢうとをまわりあらとうやさきとびゆてんへと
の段ふもあらゐる天體書
てんのつうひとかとうやそののち中あざんぢのたんごたとくへ本ふもあればわんぢの
ごとくをうりてわづぎてくとこ度ちゅうぢあさきとやくスかアとも人
ゆまこりつと本ふさうてかくとくまふもあまびとみゆかどふかどをたであく
あらきのあとさうえあらわなりもくあきあらういあうそののち中あどんぢのとびきと
とめりんぢもとりもひ天女あせんとだあれわひの詔書とくとんドゆうへをうひまのよ
までもあるあぢやうきのどうあくどをまわりあらうまことふがまうじもむのゆも
たあーもくあきあんことよやだええかうがてうとうとあらうともあくくみアおうかうかう
とあづう被祝言ふかうし文章草あ／＼百年のむ／＼までも流行／＼淨瑠璃とわづ／＼
かづき狂言ふもせ／＼とあづ元禄十四年森田座の狂言本梵天國寶船と頴せ／＼
又すふ被梵天國の淨瑠璃ふあ／＼ひて宮崎傳吉がはづくま／＼狂言あり
西鶴が俗づき江戸をまち町のさまを画て今自うりがん天國市村字方木の玉川吉孫市村
坐す御」とのふ音役とうかー圖あ／＼もの冊子へ元禄八年の印本あまび森田座より
さうふちの狂言のわづ／＼あづべー
因云む／＼の淨瑠璃へ總て六段を十二段を裂きまと
ちまく
京都ゆまと井上播磨より五段ふけ、先
らゆまと江戸ゆと寶永正徳の法までもあら古風とくあら土佐掾和泉太夫も

さうか」と
ナナ
おもひて何ゆもあき見えぎりとの御の事と。の後日ちやあどつゝ詔
おがんごんぐい
まきまももえ
いよ
ともに
今もままとふいふのゆまで彼梵天國の意て通すをわり又ま一段といふもあ

江戸八百韻

前句
古ノ物
假之使
咽乃
日也
あくま
ふかへ
きゆう
かくへ
もぐりき
来雪

五十番勾合 延宝三年 糸塚翁判

も／＼の事すま一際のゆきへを
藤簾子

門人加の慈言

前勺さ湯とものすよぞ見えやあけく
附勺かの歎ま一般ふかるゑアモ
浩然 荣親

卷之三

訛未撰
人形や素一段乃夏ホヘ素白
卯亭曰入形と木偶小马りあ
未一段也て六月と
きよ

卷之三

三茶三幅一對 延寶九年
容顔をあざえよ。御室もちや五六
年。云々。まことに。非皆かくもとへ

卷之三

高枝とふみわを評する後は一容顔もあらうと
濟寧も云ふ
さういふが娘のアラジンやゾー云々まことに
又多く俳諧のみ見え

前回付次第元禄十三年卯本一
馬

附歌かき元禄十三年印本一名馬さとひ
わく べき

前勺
おほじゆく
阿ホ
孤
肫
末
一
双
み
ま

六三 德而亡失
勿用，利幽人，无咎。君子终无尤也。

卷之三

是の形をもじりて生れ
梵天國六段目末一段の説へ津羅隠より生る
まゆり

卷之二

やとの事ゆきは義季の者を云
川子刺梓の年号と謂ふとも画風

卷之三

ゆえび
羅波延の教よりあらわし冊子

卷之三

三

還魂紙料上之卷畢



彩霞巖庵
九賀

